
俺と吸血鬼の非日常

兎鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と吸血鬼の非日常

【Nコード】

N1879V

【作者名】

兎鬼

【あらすじ】

ある日、突然吸血鬼の少女が家に押し寄せてきた。君たちにもそのような経験はあるだろうか？

天野^{アマ}輝也^{テルヤ}はそんな経験をした一人。吸血鬼が言うにはヴァンパイアハンターから逃げてきたのだと、彼は彼女をどうするのか。

『一章 吸血鬼』（前書き）

文章がおかしかったりしたら教えてください

『一章 吸血鬼』

アマノ テルヤ
天野 輝也は暇をしていた。

何せこうも何事もないとつまらないのである。
ゲームだって単調な行動が続けば飽きてくる、そんな感じだ。

「あーあ、なんか《非日常》でもふりかからねえかな・・・」

どこぞの女子高生でもない限りそんな非日常は来ない。
そんなことを思っていた。

その日の夜、ガンガンと窓を叩く音がする。
今日はそんなに風は強くないはずだ。

恵家は不思議に思い、カーテンを開ける。

「ひっ・・・」

それを見て輝也は悲鳴を上げる。

窓には白い手が張り付き、窓を叩いているのだ。
しかし、恐怖よりその得体の知れないものへの好奇心により輝也は窓を開けた。

するとヒョコ、と下から一人の少女が顔を出す。

「静かに！」

少女はそう言うのと窓を乗り越え、部屋に入ってくる。
窓とカーテンを閉め、息を潜める。

輝也是んな少女をぽかと見ていた。

羽が背中から生え、服はふりふりなドレスを来ている。

割りとき愛らしい顔つきだ、年齢は・・・中学生と言ったところか？

勝手に分析していると

ピンポン

自宅のインターホンが押される

「あ・・・いい！？絶対に『いない』って答えてね！？」

ヒソヒソと少女が命令する、何が来たのだろう。

輝也是一応警戒し、玄関を開ける。

そこには身長が高い男がいた。

スーツを来ている、セールスか？

「夜分にすみません。こちらに小さな女の子は来ませんでしたか？」

嫌に低い声で男はいう。

恐らくあの少女だろう。

「いえ、いませんが・・・」

言われた通りに嘘を付く、いや、付かざるを負えない。

男の目には殺意しか宿っていなかった。

「そうですか、失礼しました」

そう言うと男は暗闇へと消えていった

「行っただか・・・」

足が震える、怖かった。
情けないが本音だ。

「ねえ、行っただか？」

少女がこっそりと顔を出して聞く。

「ああ、言った、しかしなんなんだ？」

ガチャリ、と玄関の鍵を閉め、リビングの電気を点け、テーブルに座る

「あの男は・・・」

思い切って聞いてみた

「あれは・・・」

少女は暫く悩み

「あの男はヴァンパイアハンター。なの」

ヴァンパイアハンター、それぐらいは知っている、いやそれよりも

「え、だとすると君は吸血鬼？」

少女は頷く

「えっと、ポマード」

「それ違う」しまった間違えた

「何か証拠を・・・まあその羽は本物っぽいけど・・・」

「じゃ、じゃあ・・・」

少女は目を閉じる。

バサア！

そのときだ、少女の体が無数のコウモリになり、リビングを飛び回る。

俺が啞然としてしているとコウモリは椅子の上に集まると少女へと戻った。

「・・・信じてくれた？」

「あ、ああ・・・」

信じるしかないだろう、しかし吸血鬼なんて吸血鬼なんて・・・最高じゃないか！

何を隠そう俺は吸血鬼が大好きだ、ゲームや漫画で見て惚れたが最近は吸血鬼っ娘にもハマっていた。

そしてこの状況、喜ばないでどうする？

「どうしたの？ニヤニヤして」

ついニヤついていたようだ

「いや、何でもない」

すぐに冷静さを装う

「ところでこれからどうするんだ？」

「暫くここに住もうかなー」

「はい？」

「ダメ？」

「いいや！ダメじゃない！全然いいよ！」

「う、うん。ありがと、日の国の人は親切だって噂ほんとだね」

「あ、ああ。日本は初めてか？」

「うん、必死で逃げてたらここに着いたの」

「そうだったのか、大変だったな」

「うん・・・それ、で・・・」

こくり、こくりと船を漕ぎ始めた

そしてカクンと首を下に向けるとそのまま寝たようだ

「そんなに疲れていたのか」

俺は彼女を抱っこするとベッドに寝かせ、自分は床に寝た

『第二章 吸血鬼がいる生活』

翌朝、俺は床に寝ていた。

何故ベッドで寝ていないのかとベッドを調べると

そこには可愛らしい寝顔で眠る天使のような吸血鬼がいた

ああ、そうか。あれは夢ではなかったのか。

そう思うと嬉しいようなこの得体の知れない吸血鬼への恐怖という
かよくわからない感情が混ざり合い輝也を悩ませる。

取り合えず朝食を作るために台所へ向かう。

両親は相変わらず海外出張だ、寂しくは・・・無い、たぶん。

いや、寂しいわけがない、なんせあの吸血鬼っ娘がいるのだから。

ああ、これでリビングで一人テレビを観ながらの夕飯は終わるのか、
そう思うとなんだか嬉しさから涙が・・・

「つといけね」

思わず目玉焼きを焦がすところだった。

輝也は上手に目玉焼きを皿に乗せる。

「・・・吸血鬼って目玉焼き食うのか？」

疑問に思ったが吸血鬼も生物である以上血だけでは栄養が足りない
だろう、鉄分には困らなそうだが

そんなことで輝也は二枚目の目玉焼きを焼き始めた

「うわ、双子の卵だ」

悔しいがこれはあの吸血鬼の分だ

「・・・ん」

私は自然に目が覚めた、ベッドの懐かしい感触が分かる。

見慣れない部屋、確か私は日の国に来て、そこに住む人の家に・・・

「あまり覚えてないや」

なんせ疲れていた、昨晚の記憶が抜けているようだ。

下からいい匂いがする。

私は下に降りてみた、すると少年がテーブルに料理を並べていた。

「あ、おはよう！目玉焼き食べる？」

私は頷いた、私は朝に弱い。寝起きはあまり話したくはないのだ。

椅子に座ると見慣れない棒が二本。

これが噂に聞く箸と言うものではないだろうか。

突く、割く、掴む。たった二本の棒でこれまで機能する不思議な食器、使いこなすのは難しいようだけど。

私はその箸をじっと見つめていたのだろう、少年は慌てた様子でナイフとフォークを持ってきた。

「・・・ありがとう」

まだ頭がぼうつとする、この少年は確か私を匿ってくれた・・・

「美味しい・・・かな？」

少年が不安げに聞いてくる

「う、うん！美味しい！」

「いや、その何もつけないで食べる人は初めてで・・・」

少年の皿を見ると黒い液体がかかっている、調味料だろう、何かは知らない

「あ、何かける。醤油？マヨネーズ？」

「しょ、しょうゆ・・・」

初めて耳にする調味料だ。

少年は黒い液体の入った瓶を手にとると私の料理にかけた。
いい匂いがする

私はその目玉焼きを食べた。美味しい。

いつもは何を食べていただろう、血ばかり吸い、人を喰らっていたはずだ。

ああ、あの方は今何をしているのだろう。

そう言えば日本は初めてだと言っていた、なのに箸を出してしまっ
たときはひやひやしたよ。

俺は朝食を食べ終わると食器を片付け、二階に上がる

暫くして少女も俺の部屋に来る

「・・・あの、昨晚はありがとうございました」

「ああ、いやいや」

いや照れる、しかし可愛い

「あの！私になにか出来ることがあれば・・・！」

そこにいるだけで十分だよ。なんてこと言えば黒歴史に即追加される

「いやいや、ゆっくりしてってくれ」

「うー・・・でも・・・」

悩む姿すら愛らしい。やべ、今の俺かなりキモいかもな
しかし彼女は何かしてやりたいようだ

『三章 吸血鬼とお出掛け』

「あ、そつだ。買い物に行こうか」

「買い物ですか、この辺りに市場なんてありましたっけ？」

「あー、市場じゃなくてスーパーだな」

「スーパー・・・？」

「ま、行ってみればわかる」

早速仕度をして外に出ようとしたときだ

「あー・・・そついや吸血鬼は日光ダメだったな」

物置から母が使っていた日傘を取り出し、吸血鬼に渡す

「それにこのドレスは目立つな、それしか服はないの？」

「え、ええ・・・これしか」

参ったな、俺には妹も姉もいない、服なんて・・・

「あ、そつだ」

俺は吸血鬼を連れて家のすぐ裏にある山を登る

暫く登ると見慣れた人物がいた

ここは“鶴野神社”、そこで何か踊っているのは幼馴染みの鶴野ツルノ清香キヨカだ

「おい、何してる」

「舞いの練習だよ、婆ちゃんに認めてもらうためにね」

いやそれは格闘ゲームに出てくるヨガの人の躍りでは？と言いたかったがいつもこんな感じなので放っておいた

「む、可愛いお嬢さんを連れて、何か用？」

「ああ、こいつに着せたい服があつてさ、いらぬ服があれば貰いたいんだが」

「なるほど、あい分かった、暫し待て」

そういつと清香は社の隣にある家に戻り、暫くして段ボールを抱えて戻ってきた

「ほら！服だよ！サイズは大丈夫かな？」

「ああ、ありがとう。助かった」

吸血鬼が物珍しげに段ボールに入った服を見ている

「あ、私が着せてあげるね」

そついうと吸血鬼の腕を引っ張り、家へまた戻る。

そう言えばまだあの吸血鬼の名前を聞いていないな
暫くして二人は戻ってきた。吸血鬼には水色の可愛いワンピースが着せられていた。

「驚いたよ、偽物かと思ったら本物の羽だなんてね」

ついでに吸血鬼であることがバレた。

「申し訳ないが妖怪はNG・・・なんて言わないよ。婆ちゃんじゃないしね」

巫女でありながら妖怪を見逃す、そんな彼女のご慈悲をいただいた

「あ、服はちゃんと羽の部分を切ったからね」

そこまでしてくれた清香に感謝をする。今度飯を作ろう。

「あ、そうだ」

清香が俺を呼び止める

「私ちよつとの間旅行するから不在になるわ」

「ああ、分かった」

そう言っていると俺たちは山を降り、スーパーを目指した。そして、気が狂いそうな猛暑のなか、スーパーに辿り着く。吸血鬼はスーパーを見上げ

「わぁ！大きなお城！」

などと言っている、しかし彼女が住んでいた場所にはスーパーもないのか？今の時代そんなところはどこか寂れた村だろう。スーパーをお城と表現する辺りお城は存在するようだが

「こちら、走るなよ」

「凄い凄い！早い！」

車を見てはしゃぐ姿は何とも愛らしい、いや和んでる暇はない

「危ないって！轢かれるだろ！」

俺は吸血鬼の手を引っ張り、こちらに寄せる

「ごめんなさい」

と吸血鬼はシュンとする

「まあ無事でよかったな、さ、中に入る」

そう言うのと自動ドアを潜り、店内に入る

自動ドアにも驚いていた、可愛い。店内の人々はこの吸血鬼をジロジロ見ている、まあ羽が見えているから仕方ないか。だが他人からしたら何かのコスプレ程度にしか見えないので気にしない。

「まずは野菜と肉だな」

精肉コーナーまで足を運ぶと吸血鬼は珍しげに豚肉やらを眺めている

「これは・・・人間なのか！？人間も人間を食べるの！？」

大声でトンでもないことを言う吸血鬼、そうか、吸血鬼にとって人間は捕食の対象か

「バカッ！静かにしろ！」

あーあ、周りから変な目で見られてるよ。恥ずかしさに顔を赤らめていると

「あれ？輝也じゃん」

俺の名前を呼ぶ声がしたので振り返ってみると、そこには友人の夜^ス須^{ケイ}圭也がいた

「可愛いお嬢ちゃんを連れて・・・いつの間に彼女が出来たんだ？」

「そ、そんな！彼女とかじゃ」

「ふふふ、またまた、変な羽なんて付けて、何かのコスプレか？」

「いや、これは・・・」

・
彼女は吸血鬼だ。とは言えない、第一言っても信用してくれるか・

「ま、いいやわな！んじゃ俺は帰るわ！」

そう言うとき圭也は人混みのなかに消えていった。適当に豚肉にを取

るとカゴに入れ、次は野菜コーナーへと向かう。

「わぁ！野菜がたくさん！」

野菜コーナーなのだから当たり前だろう、と言いたところだが彼女にとっては初めてのスーパーだ、黙っておこう。

「よう、輝也」

突然背後から声がして、ビクツとなる。早まる鼓動を押さえながら振り替えるとそこには友人である江野^{エノ}海^{カイ}がいた。そのがっしりした体型に関わらず気配を消して背後に立たれると正直怖い、何度かストーリーカーに間違えられたこともあるそう。

「なんだその可愛い彼女は、羨ましいな」

ゆっくりと話す、彼はこんな感じだ。ふと吸血鬼に目をやると野菜コーナーの隣にある惣菜を見ていた。

「いやいや、彼女なんかじゃ」

「ふっ、そうか。それはそうと圭也を知らないか？はぐれてしまっ
てね」

「圭也？圭也なら精肉コーナーで会ったよ」

「そうか、ありがとう」

そう言うと海は精肉コーナーへと向かった、相変わらずの威圧感である。

「おーい！迷子になるなよ！？」

俺は吸血鬼を呼び、野菜を取りカゴに入れるとレジへ向かい、会計を済ませ家に帰ることにした。

「今日は楽しかったです！」

帰り道、吸血鬼は満面の笑みを浮かべて言う

「そう言えばお前は家族とかいるのか？」

「・・・お姉ちゃんが一人、いたけど・・・今ははぐれちゃって」

シユンとした顔を見て輝也はすぐに謝った。

「でもよかったですよ、お姉ちゃんがなくて」

「え？なんで？」

「お姉ちゃんは私が人間と遊んでいると殺しちゃうもん」

「誰を・・・？」

「人間」

今、お姉ちゃんがなくてよかったと思う

「そっか、そんなに人間が嫌いか」

なんだか悲しい気もするな、やはり食料程度に見られてるのか

「うっん、嫌ってるんじゃないくて焼きもちだと思っ」

これはまた嫉妬深い姉なこと。そうしていると自宅の前に着く、ああそうだ、また忘れるところだ

「なあ、お前の名前はなんなんだ？」

一番聞きたかった質問をぶつけてみた

「私の名前？私は・・・《ユナ》」

「ユナか、いい名前だ」

「ありがとう・・・」

ユナは少し頬を赤らめた。

「さ、家に入る。肉がダメになる」

『四章 吸血鬼と宿泊』

あれから何日かが経ちまして、一通の手紙が届きました。手紙は圭也からで別荘の屋敷に泊まらないかとお誘いだった、金持ちめ。いい忘れていたが今は夏休み、こう言うのもいいだろうと言うことで泊まることにした。もしまだ旅行に行っていないのなら清香を誘おうと神社まで行ったが

「おや、輝也！清香を知らんかね？」

清香のお婆ちゃんが聞く、どうやら先日から清香の姿が無いらしい

「あんのバカ孫め、家出なんぞしおって」

ぶつぶつと言いながらも探す、よほど心配なのだろう。

俺も探していると社の戸が開いていることに気がついた、戸の前には錠前が落ちてある、随分と前から使われている錠前なので錆びており石か何か硬い物で叩かれたのか壊れている。

恐る恐るなかに入ってみるとまず目に入ったのは御神鏡、倒れてしまっている。

俺はその鏡を起こし、他に何かないかと見渡すが何も盗られたものも無さそうなので社を出た

「清香はいたかえ！？」

お婆ちゃんと合流した俺は横に首を振る、お婆ちゃんは肩をがっくり落とし、ため息をつく

「あ、社の錠前が・・・」

俺は壊れた錠前をお婆ちゃんに渡した。するとその錠前を見てお婆ちゃんは笑いだした

「なるほど！流石は孫じゃ！考えが同じじゃのう」

「あの、何か分かったんですか？」

「ああ、分かったとも。ただ教えるわけにはいかんのう。そうだ、鶴野神社の神主になれば――」

このお婆ちゃんは大変俺のことを気に入っており、次期神主にすると言って聞かないのだ。何でも若い頃の爺さんに似ているんだと。

俺はまあ考えておきます。と言い、神社をあとにした。しかし清香がいないとなると・・・まあいいか。ユナと行こう。

自宅に着くやいなや俺はユナに泊まることを伝えた。ユナは喜んで承諾、準備を始める。
まだ早いと思うが。

しかしユナは可愛いな、綺麗な金色の髪、夕日のように綺麗な紅い瞳・・・

「あの・・・何か？」

ハッと気がつく、どうやら見とれていたらしい

「な、何でもないよ！ただ、楽しみそうだなと」

「楽しみですよ！久しぶりですもの、こんなこと」

「そうか、久しぶりか。そう言えばどこから来たんだ？」

それを聞くとユナは黙り込み、悩ましげに頭を抱える

「あ、言いたくないのならいいよ」

「じゃ、じゃあそうします」

言えないことが、何だろうな。悩んでも仕方ないが

暫くして、昼頃になる。セミはさらに鳴き始め、夏を思わせる、俺は素麺を茹でると氷水の入った器に入れ、テーブルに並べる。ユナは珍しげに素麺を食べる、箸の扱いにも慣れたようだ。

「あの――」

ユナが突然話しかけてくる

「ん、なんだ」

「その・・・やっぱり吸血鬼って評判悪いんでしょうか・・・」

何を突然、となったが答える

「今じゃあ吸血鬼なんて知ってる人なんてそうそういないよ・・・」

せいぜいマント羽織ったああいうのしか知らないだろう、ましてや

このような可愛らしい娘が吸血鬼とは夢にも思つまい

「そうなんですか・・・あまり知られてないんですか」

「いや、知られてないっつーか忘れられてる」

「わ、忘れられてる!？」

「ああ」

「そこまで吸血鬼は数が減ったのね・・・」

とぶつぶつ呟き始める、昔は多かつたのだろうか？

そんな会話を終わると食事も終わる、ユナはテレビに夢中になっている間、俺は二階に上がり、勉強を少しするとまだクリアしてないゲームを始めた。

約一時間、ゲームオーバーになったところで心が折れ、ゲームをやめる。そろそろよい頃合いなので宿泊の用意をし始める

しかし、突然泊まらないかとはどう言つた風の吹き回しだろう。また良からぬことを企んでいるのではないかと輝也は不安になったが承諾した以上、断るのも気が引ける。ユナは昼にやってるドロドロの愛憎劇ドラマを観ている。やれ、あんな恐ろしいものをどうして女性は夢中になれるのか。と、そんなことを考えているうちに用意は出来た、ここで俺は何時、そちらに向かえばよいのかとメールで聞いてみると16時に来てくれとのこと、今は15時、あと一時間は猶予がある。が、そろそろ出よう、俺はユナにそろそろ向かうことを伝えると家をあとにした

『第五章 吸血鬼と魔女』

あれから圭也の家に着いた訳なのだが。

「あの山の上にある別荘に泊まるんだよ」

と金持ちアピールしてきたのでその山を登り始める、しかし山は暗くなれば何も見えなくなる、危ない

「懐中電灯は？まあまだ明るいからいいけど」

「忘れた、さっさと登ろう」

「しかし彼女を連れてくるなんてねえー。清香は？」

「知らねーよ、どっか行つた」

「ああそうか、浮気されたから逃げたか」

「浮気！？なんでだよ！」

「くくっ顔真っ赤にして」

「なんだよ！」

そんな会話をしてるうちに別荘の館が見えた、その館に入るとすでに電気が点いていて明るい。すると中から一人の少女が現れる

「あ、輝也だ！なに？あんたもお泊まり会？」

それは友人の桜花^{オウカ} 咲也^{サクヤ}だった。

「ああ、そうみたいだ」

「その隣の可愛い娘は誰？」

「ああ、こいつはユナって言ってな。なんやかんやで俺んちにいる」

「へー、ユナちゃんか」

彼女はユナを人形のように抱えるとそのまま奥へ消えた

「ま、上がりなよ。言っておくがゴムは付けるよ？」

「うっせー！なんでそこで！」

「あーくそっ！強い！」

俺たちはいま、ゲームをして遊んでいる。四人で戦い相手を場外へ吹っ飛ばすゲームだ。

「へへん！ネタキャラ扱いされても俺が使えばつよ——」

今度はユナが使用しているキャラが圭也のキャラを吹っ飛ばした。割りと容赦のない娘である。

「まさか貴女と一騎討ちなんてね！」

咲也は燃えている、いい上手くて。

・・・結果はユナの勝ち、読み合いの連続の末、ユナが一枚上手だった

「あー！何か他にゲームねえ？格ゲー以外で」

俺は圭也にそう言つと

「あるよ、パソコンのやつ」

「女の子同士がなんとかカードとか使つて戦うアレだろ？格ゲーじゃん」

「んーならあれは」

とあるゲーム機を指差す、黒色で艶掛かったボディがカッコいいゲーム機だ

「あれで俺とこれやろう！」

と出したカセットはコマンド入力で技が出るといふ格ゲー

「また格ゲーか！そんなに格ゲー好きか！」

「ああ好きさ！沢庵の次ぐらいに！」

「どのぐらいだよ！」

そんな言い争いをしている間、ユナと咲也は夕飯を作っていた

「あら、包丁の扱いが上手ね」

ユナは顔を赤らめ頷く

（可愛い・・・！）

咲也はハアハアと息を荒くし、興奮する。気がつけばユナの腰に手を回し、抱きついていていた

「ヒヤッ」

驚いたユナは包丁を落とす、その拍子に指を怪我してしまった。

「ああ！ごめんね！」

指から出た血を舐めとる、この変態的行動にユナは驚きを隠せないようすだった。手を引くと恥ずかしそうに顔を背ける。

そんなユナを緩んだ笑顔で眺める咲也にユナは身の危険を感じる

「あつ、鍋が」

鍋に入っていた味噌汁が煮えたぎり、溢れそうになっていた。ユナは火を弱め味噌汁の味見をする

「どう？」

咲也は味見の感想を聞く、異様に顔が近い

「お、美味しい」

「よかったあー」

と咲也は胸を撫で下ろす、次に炊飯器が音を鳴らしたので確認、よく炊けている。

「おーい！ご飯出来たよ！」

咲也はリアル格闘ゲームをしている男二人に言う。夕飯は味噌汁にご飯、あとハンバーグだ

男二人はがつつき、喉に詰まらせる。この馬鹿二人を他所に私はユナに『あーん』とされる妄想をして悶えていた。しかし彼女、とても歯が尖っている、舌とか噛んだら痛そうだ

などとユナを観察していると

「あ、あの」

「ん、なあに？」

「咲也さんは・・・私のこと、好きなんですか・・・？」

最後のほうは恥ずかしさで声が小さくなっていたが聞き取れた

「え、あ、ああ！うん、好き！大好き！」

するとユナはさらに顔を赤め、俯く。不味かっただろうか。それ以降、ユナは話さなくなった

夜、みんなは館のテラスに行き、星を見ていた。辺りは暗くよく星が見える。

「くっ！銀河宇宙に広がる暗黒物質が俺の右目に反応してやがるっ！」

圭也がちょっと何言ってるのか理解出来ない、こいつ怖い

「ね、ねえユナちゃん」

咲也は恐る恐るユナに話しかけた

「なに？」

「やっぱり怒ってる？」

「ううん」

ユナは少し悲しげな表情になる、咲也はどうしたのと問う

「ちょっと・・・お姉ちゃんを思い出したの」

「へえ、お姉ちゃんね。なんて名前なの？」

「ユリック、って言うんだ」

「へえ、ユリックさんは元気？」

ユナは首を横に振る

「分からない、どこかに行っちゃったから」

「っそうなんだ。どこかに・・・」

「さあ銀河の果ての大彗星にお願い事を！」

「ああ、お前が死ぬことを願うわ」

と輝也は冷ややかに言い放つ

「でも、今は・・・輝也がいるから・・・」

「・・・そうね。寂しくないわね」

そこで二人の会話は終わる。

星を見終わったあと、みんなは部屋に行き、眠ることにした

お互いに別々の部屋である

「いや星が綺麗だったな」

と輝也は呟きベッドに潜る。今は何時かと携帯を開く、深夜だった。そしてここは圏外になっている。不便だなと思ったが睡魔が襲ってくる、輝也は目を閉じた

あれから何時間だろう

「輝也！起きろ！」

部屋が突然開き、圭也の音がする。何やらただ事ではなさそうだ

「なんだ、どうした。火事か？」

「ああそうだ！火事だ！」

「マジかよ！おい、咲也とユナは！？」

「まだ部屋だ！行くぞ！」

二人は部屋を出るとまずここから近いユナの部屋へ向かった

「ユナ！大変だ！」

無防備に鍵をかけていない、ドアを開けると寝惚けるユナを抱き抱え部屋を出る。そして咲也の部屋に行くと

「っ！咲也あ！」

咲也の部屋から火の音がする、圭也はドアを開けようとした

「待て！開けるな！」

「な、なんだよ！」

「バックドラフトが起こる！」

「っ、そうだな……。咲也！無事か！」

返事は全くない。俺は最悪の状況を考えて

「おいおい……。こんがりグリルでお出迎えはやめてくれよ？」

そんなことを言っているが、声は震え、目には涙が浮かんでいる

「やあ、あんた、吸血鬼だね？」

咲也の部屋から声がする。バン！とドアが内側から蹴破られると姿を表したのは黒いローブに身を包んだ少女である

「なんだよお前……。それに吸血鬼って」

そうだ、ユナは追われている身だった。まさかこんなときに！

「さあ、死んでもらおうか。吸血鬼さん」

少女は手の平に火の玉を出す。それをユナに投げつけようとしたときだ

「お前のせいだ！ああああ！！」

圭也が殴りかかる

「くっ！このガキ！」

振りほどくと圭也は壁に頭を打ち、気を失った

「邪魔が入った、まあいいや。死ね」

そついい火の玉を投げつける、輝也はユナを抱き抱えその場を逃げる。とにかく山を降りれば・・・いや、しまった、今は夜。危険すぎる

取り合えず近くにあった部屋に入り、鍵をかける

「はあはあ、なんだよあいつ・・・」

「輝也、ごめんなさい」

「いや、いいんだ謝る必要はない」

「どこだよ！安心しな！私が消し炭にしてあげるから！」

さつきからドアが何かを壊している音がする。ここがバレるのも時間の問題か。ふと窓を見る、窓を開ける。そこから逃げられないかしかしダメだ、ここは二階。飛び降りても何とかかなりそつだが地面の状態が悪ければ・・・

そもそも何故あいつはユナがここにいると分かった？尾行でもされていたか？それに何故あいつは火事に気づけた、燃えていたのは咲也の部屋だけ。俺に報告するまえに咲也を助けないか？

そこで行き着いた答え、信じたくはない。友人がまさか・・・

そのときだ

ドアが破壊され、少女が入ってくる

「見つけたあ！」

「ま、待て！何故こんなことをするんだ！咲也！」

「・・・咲也？誰だそれは。私は《ライマー》！獄炎の魔女さ！」

燃え広がった火がさらに大きくなる

「ユナをなぜ殺そうとするんだ！何もしてないだろ！」

「・・・お前はここ最近で起きている謎の事件を知らないのか？」

「謎の事件？」

「学生や子どもが死んでしまう事件。胸の辺りを何かで刺され、体がとてもダルくなり、三日経つ頃には死んでしまうのさ」

「そ、そのどこにユナが関係してるんだ！」

「犯人は吸血鬼、だから片っ端から吸血鬼を駆逐してるんだよ」

「な・・・」

俺は言葉が出なかった、狂っている、なんてやつだ

「ま、私もこれは酷いと思うけどね。仕事だから仕方がない」

ライマーはまた手に炎を宿すと

「ま、許してね。『母殺しの炎』!」

一際大きい火の玉が放たれる、俺は迷わなかった。迷う時間はなかった。俺は、ユナの前に経ち手を広げユナを守る。覚悟を決め目を閉じる。だがいつになっても痛みや熱は襲ってこない。目を開けてみると

「ユナ・・・!」

ユナは手で火の玉を打ち消していた、手は焼け焦げ、煙を上げている。しかしその火傷はみるみるうちに治る

「そんな理由で私たち吸血鬼を・・・」

「なんだ、小娘が私に抵抗するか?」

「黙れ」

ユナはライマーを睨み付ける、その迫力にライマーは怯む

「許さない・・・貴女の肉と言う肉を全て切り刻んでやる」

輝也はそのユナに恐怖した

「へ、へへっ!来いよ!お前なんか怖くないさ!」

ライマーは明らかに自信を無くしている様子だった

「罪を償え、愚かな魔女。『アンソニーはのどをつまらせて』」

ユナは一瞬でライマーに近寄る、そして、その鋭い爪で、切り裂く、切り裂く、切り裂く、切り裂く

「浅いんだよ！」

しかし力が弱かったのかライマーはユナを突き飛ばす

「あーあ、ローブが台無——」

ライマーの顔に冷や汗が出る。よろよろと後ろに下がる

「毒・・・だなんてね・・・」

ガハ、と血を吐くとライマーは逃げ出す

「よかった・・・」

とユナはほつとする。そこに

「輝也！大丈夫か！」

圭也が助けに来る、その後ろには咲也の姿が

「早く来い！ここも燃えるぞ！」

俺はユナの手をとり、館から逃げ出す、ぐっぐつと燃え上がる館。そして消防車のサイレンが聞こえる

「大丈夫かね！君たち！」

消防隊員に俺たちは救助された。こうしてとんでもない事件は終わったのだ

『第六章 吸血鬼と入院』

目を覚ますとそこは病院だった、あれから火事は消火され、俺たちは保護された。後々のニュースで見たが、あの館は全焼したが、周りの木々には一切燃え跡がないという不思議な火事だと報道があった。それにあのライマーのことを聞いた。だがそれらしき人影を見てはなかったようだ、ではライマーとはなんだとたのか、俺たちが見た幻覚だったのか？ いや、ただ可能性があるとすれば・・・俺はカーテンの向こうにいるであろう圭也と咲也を見た。ただそれは友人を疑う、これだけは嫌だった、だがそんな考えが出る自分が嫌だった。俺はみんなの様子が気になり、カーテンを開ける。そこには咲也が眠っていた、しかしなんと綺麗な肌か。

「ん？」

俺は彼女の首辺りに針で刺されたような傷跡が二本あるのに気がついた、そしてすぐ正体が分かった。まさかこんな吸血鬼小説で読んだことになるうとは。俺はすぐさまユナのベッドを見た。するとやはり、ユナは幸せそうに眠っていた、口元から血を流し。吸血鬼だと言っことは覚えていた、だがなぜ今、血を吸ったのか

「ん・・・輝也・・・」

ユナは目元を擦りながら目を覚ます、いや吸血鬼に咬まれたら吸血鬼になるのではと咲也を見た、が何ともなさそうである

「うわ、なにこれ」

ユナは口元の血を拭い、驚いていた

「咲也の血を吸っただろ」

「え・・・覚えてない」

まさか無意識ではないよな、さつきから咲也が静かで怖い、死んでいないよな

「おはよー、何があつたの・・・」

と咲也は起きる、大丈夫かと聞くと何ともなさそうな顔をする。黙っておくべきか

「ああ、まだ圭也は寝てるね？」

俺はカーテンを見る、まだ寝ていると判断し、頷く。すると咲也は話を続けた

「ユナって吸血鬼だよな」

あまりにも直球的な質問に戸惑う、がユナは頷く

「だよな、じゃないと追ひ払えないもの。あんなの」

「知ってたのか？」

「ええ、と言うか本来の目的は私よ。隠れたから貴方たちが狙われたの」

「え、本来の目的が咲也って・・・」

それはつまり・・・

「そ、私も吸血鬼なのよ」

なんということだ

「でもどうして私が吸血鬼だと分かったの」

ユナは咲也に聞く

「血ね、私は血を舐めればそれがどんなのか大体分かるの」

「あの時・・・」

ユナは包丁で指を切ったあの時を思い出した

「そ、びつくりしたわ。こんなにも羽根を隠すのが下手な吸血鬼を見て」

ユナは顔を赤らめる

「そうだ、なら咲也はあのライマーってやつを知ってるのか」

あの獄炎の魔女たる者のことについて俺は聞いておくことにした

「ええ、獄炎の魔女ライマー。雇われハンターよ」

「雇われハンター？」

「依頼を受けて対象を狩ることで生計を立ててるやつよ」

「へえ、そんなやつが」

「そんな呑気に構えてていいの？」

「え、なんで」

「雇われっことは雇ったやつがいるってことよ。それに何故あいつは私たちの居場所が分かったか、それは依頼人が私たちのことを知っていたから。かしらね」

と咲也はカーテン、もといその向こうで寝ているであろう圭也を見た

「まさか、やめてくれ。友人を疑うような真似はしたくない・・・」

「じゃあ何故あいつが私たちの居場所が分かったか分かる？」

「それは・・・」

確かにそれが一番辻褄が合う、だけど――

「ま、まだ答えは分からないわね。せいぜい生き延びることね、お互いに」

そう言うと咲也は病室を出た

しかし、圭也が敵だというのは信じたくない。けど少し疑いを持っている部分もある。どうすりゃいい！

「輝也？顔色が悪い——」

「輝也あ！大丈夫かえ！？」

そこに清香のお婆ちゃんが病室に入ってくる

「お母さん！病院では静かに！」

清香のお母さんまで

「次期神主に何かあつてはいかんからな！心配なんじゃ！」

待て、まだ次期神主がどうのこうの言っているのか。俺はユナにこつそりベッドに隠れるように言った。清香のお婆ちゃんは妖怪を毛嫌いしているそうだ

「あ、清香はどうなりました？」

なんとか神主から話を逸らせよう。清香の件を聞いた

「清香は大丈夫じゃ、向こうで元気にやっとなるはずじゃ。ワシだつてそうだったからな！」

「向こう？」

「高天原ちゅー場所で、な。分かりやすく言えば異世界じゃ」

「はあ、そこで清香は元気にやっけると」

「そう！だから心配せんでいい！」

てか声がデカイ、注目を浴びてるぞ

「お母さん、輝也ちゃんも大丈夫そうだし帰りましょ」

「ああそうじゃな、ではな、輝也や！」

「ああそうそう、両親には無事だって伝えておいたからね」

「あ。ありがとうございます」

清香のお母さん、お婆ちゃんも帰る、ユナがベッドから出てくる
そして入れ替わりに咲也が戻ってくる

「ほい、ジュース」

と缶を二つこちらに投げる。二人は上手く受け取り、缶を開け中身を飲む。ってお汁粉じゃねーか！ユナはオレンジジュースか、いいなあ。というか何か恨みでもなるのか咲也は

「あるさ、こんな可愛いユナと同居だなんて妬ましい・・・羨ましい」

「お前がユナと一緒にいたらユナの体があぶねーよ」

「あら？私は貴方のほうが危ないと思うけど？」

「なんだよ、突然その・・・襲ったりしたりなんかしねー・・・
たく何を言わせてるんだお前は」

アハハと咲也は笑う、するとすぐ真剣な顔になり

「で、どうする？私としては暫くは圭也と離れたほうがいいと思うの」

「ま、まあそれが得策だろう、ただどこっちが離れたら強行手段に出ないともいい切れないだろ？」

「圭也はただの人間よ？貴方にはユナがいるじゃない。すぐに殺してくれるわよ、なんなら今彼の胸にナイフでも突き立てる？」

「な、何を言い出すんだ！」

この信じられない発言に怒り、怒鳴る

「ねえユナ」

「な、なに？」

「貴女、ライマーを追いつたときの記憶はある？」

「ない・・・」

「やっぱりね」

何がやっぱりなのか、俺が問いたただそうとする前に彼女は言う

「この娘、あまり力を制御出来ない————と云うか使ったことがないから使い方を知らない。って感じね。あなたのお姉さんはどんな人だったの」

「えと・・・私のこと大切に想っていてくれて・・・私が人間と遊んでたら妬いてその人間を殺すぐらい好きで――」

「ユリックねえ、長い間吸血鬼をやってるけどそんな暴君吸血鬼は聞いたこと無いわ」

「それが何か関係あるのか？」

「いや？聞いてみただけ」

何だよこいつ。しかし力を制御出来ないとは。確かにあのときのユナは何かおかしかった

「ねえ輝也」

「なんだ」

「これは予想だけど、これから先、まだまだユナを狙うやつが現れるかもしれない。けどそのたびに貴方はユナを守ってね？」

「何を言ってるんだ、正直守られてるのは俺だよ」

考えれば俺もただの人間だ、なんの武器も無ければ能力もない。こんな俺に何が出来る

「そうかしらね？」

フフフと咲也は笑うとベッドに戻る

あれから数日後、火傷も治り、退院した俺たちだったが圭也から連絡が無い。こちらから連絡しても反応無し。ただ忙しいだけなのだろう。もしかすると病院での話を聞かれていないだろうな？

「むー・・・どうするか」

いや、圭也は関係ない。そうだ関係ないはずだ。と自己完結させておこう。

『七章 吸血鬼と機械』

江野 海——彼ならば圭也との連絡を付けてくれそうだが、まず海に連絡せねば。

・・・三度コールしたあと低い声が聞こえる

「もしもし」

「海か、今どこだ」

「学校だ、部活」

「ああ、部活動中か、悪かったな」

そう言えば海はロボット研究会に入っている。大柄でありながら器用な奴なのである。

「いやいい。何か用か？」

「あのさ、圭也なんだけど、何か連絡なかったか？俺が連絡しても反応ないんだ」

「・・・俺も連絡は取っていないな、何か用があるのか？」

なんだ今の間は

「いや別になんで連絡を寄越さないのかなーって」

「そうか、まああいつもああ見えて忙しいだろうな。それはそうとこちらにこないか？新作のロボットを見せたくてな」

「ああ、そうか。ロボット研究会はお前一人だよな。見せてもらうよ、新作」

「ああそうだ。あの彼女も連れてくるといい。挨拶もしておきたいからな」

「ああ、分かった」

通話を切り、ユナに学校に行くことを伝える。ユナは喜んで着いてくることにした、今は昼、日傘を忘れず持たせ学校へ向かった。

校舎に着いた、今は夏休みなので部活がある人しかいない、俺たちはまず海があるロボット研究会の部室まで行くことにした、グラウンドでサッカー部が練習しているがユナには気づかず練習に励んでいる、バレたら厄介だ。こっそり校舎に入ればあとはこちらの物、なに食わぬ顔で階段を上がり、ロボット研究会の部室前に到着する。

「よう、来たぜ」

「おお、来たか。まあ座りなよ」

と椅子を用意してくれた、俺たちは椅子に座り海と話す

「それで、新作はどれだ？」

「いや、少々大きくてね、グラウンドじゃなきゃ見せられないな」

そんな大きな物を作っていたのか

「まあ暇潰しになる話はある。・・・ここ最近起きている怪事件だ」

「まさか・・・三日経てば死ぬあれか？」

ライマーの話を思い出した、あいにく新聞は取っていない

「ほう、知っていたか。確かにそれだ。だがこれは新聞はおろかテレビですら報道されていない事件、なぜ知っている？」

「そ、それはだな。というかそんな極秘事件をなぜお前も知ってるんだ」

「ふふ、俺の情報網は意外に凄いぜ？」

確かこいつ、顔がかなり効くやつだったな

「妙な幻覚が見え、段々と体がダルくなり、三日経つ頃には死んでしまう病・・・」

「病？俺は吸血鬼の仕業だと聞いた——あっ」

俺はつい口走ってしまい、口を押さえるが遅い

「ほう吸血鬼、これは初耳。確かに遺体の胸の辺りには針のような物で刺された痕があると聞いた、もしかするとその彼女のように鋭い歯を持った吸血鬼の仕業かもな」

「な、ま、待て。ユナは吸血鬼じゃなくて・・・そのただコスプレしてるだけで」

「・・・いやただの冗談だが？」

「なんだ・・・」

「・・・まさか本当に吸血鬼なのか？」

「いや、違う！」

「フフツ、しかし吸血鬼の仕業と誰から聞いた。そもそもこの事件事態どこから聞いた」

流石にライマーなる魔女から聞いたなんて言えない、信じてもらえないだろう。そう黙っていると

「いやいい、言いたくないのなら無理に聞く必要はない」

海はユナの方を向き

「挨拶が遅れたな、俺は江野 海。よろしく」

手を差し伸べる、ユナは握手を交わす。ただユナの表情が何か変だ

「さてロボットでも作るか」

海はそこにあつた机に向かいロボットを作り始めた

「なあ、何かあつたか？」

俺はあの表情が気かりで聞いてみた

「・・・あの人、やけに冷たい手をしてた・・・」

単に冷えてたのだらう。と俺はユナに言う、クーラーが利いてるものな

そうしている内に、夕暮れになり、グラウンドには誰もいなくなる。

「誰もいないな、よしグラウンドへ行こう」

海は嬉しそうな足取りでグラウンドに向かう、俺たちはそのあとを着いていく、そしてグラウンドの真ん中辺りで待つように言われたのでそうしている。さてどんなロボットなのだらうか。

「待たせたな」

と海は戻ってくる

「ロボットはどこだ？」

「ここだよ」

と言い、指をパチンと鳴らす。すると空から一機の人型のロボットが落ちてくる、俺は思わず尻餅をつく、いやなんだよこれ。スゲーじゃん

「お、お、おおお！スゲー！なんでこんなの作れるんだよ！」

と俺は大興奮し

「それで、これはどんなことが出来るんだ？」

そう聞くと、海はロボットに乗り込み

「例えばだな、吸血鬼を倒すことが出来る」

「——え？」

反応に遅れた、ロボットの手はユナの体を掴む

「キャアアア！？」

「ユナ！——海！どういうことだ！」

「海？それは偽りの名。俺の名は——」

まさか、こいつも・・・

ストーカー
機械王。フフッ、この『対吸血鬼戦闘兵器試作一号』のテストに協力してもらおう」

するとロボットはユナを掴んだ腕をぐるぐる回し始める

「おい！てめえ！」

友人だろうが関係ない、敵に違いはないんだ！そう自分に言い聞かせ、ロボットに歩み寄る。

「さあ、見てるがいい。貴様の吸血鬼が苦しむ様を！」

ガパツとロボットの口部分が開いたかと思うと、音楽が、讃美歌が流れ始めた。なぜ讃美歌なのか、こちらは何ともない

「うわああああ！！！」

途端にユナの悲痛な叫びが聞こえる、ユナは耳を押さえ、歯をくしばっている。

「クカカカツ、どうだ、讃美歌攻撃は。次は——」

「やめろおおお！」

俺はロボットに駆け寄る、がロボットは俺を容易く腕で薙ぎ払う。吹き飛ばされた俺は激痛に意識が飛びそうになりながらも立ち上がる。

「そうだなあ、ニンニク攻撃でも」

なぜこんな時に俺は何も出来ない？何故こんなに無力？何故、こんなにも勇気がない――

震える足を押さえる、だけど震えは止まらない

「くそっ！ユナ、ユナあああ！！」

――力が欲しいか？

「え？」

ふと辺りを見れば白い世界、ここはどこだ？

誰だか分からないが力をくれるのか？

「ああそうだ、お前の欲望に応えて俺は出てきた」

欲望、ああ俺はユナを守りたい、ユナに危害を加える奴を駆逐する力を――

「キヒツ、ならいいだろ。俺の力を分けてやる」

目の前に黒い影のような人が現れる、それは俺と同じぐらいの少年にも見えた。が、ただ黒い影で口や目は見えない。

「さあ受けとれ、お前の守るべきものを危険に犯す心配はなくなる」
ぶわ、と影は霧散し、俺のなかに入ってくる。そして何か力が湧いてくる感覚が体を襲う。

お前はなんなんだ？ 一体・・・

「なに、俺はあいつの邪な心から生まれた『荒魂』に過ぎないさ」

荒魂、ありがとう

「キヒッ、じゃあなア」

ハッ和我に帰る、アレはなんだったのか。いや、まずはユナだ。

「うおおおお！！」

俺はロボットに向かって走る、不思議だ、全く怖くない。

「なんだ！ また来たか！」

ロボットは左腕を俺目掛けて降り下ろす

「ふんっ！」

俺はその左腕を殴る。すると容易く左腕は粉碎され、ドウッと落ちる

「な、なに！？ 何が・・・」

力が湧いてくる！ 勝てる！

「ヒヒッ、いい力だ、荒魂とやらものは！」

右腕が黒い影に包まれる

「ユナを離せえ!!」

その右腕を思い切り胴体へと叩きつける

ボフッ！胴体に風穴が空き、ロボットは仰向けに倒れる。

「ユナ！大丈夫か！」

機能停止したロボットからユナは自力で抜け出し、こちらに向かってくる。俺はそのユナを抱き締めた

「よかった・・・」

心の底から安心した

「ありがとう・・・」

ユナは涙を拭い、そう言った

「・・・クソッ！対吸血鬼だから人間には弱いか！」

残骸のなかから海、いやストーカーが現れる

「ストーカーああああ!!」

俺が止めをさそうとした、だがそれはユナが止めた

「もうやめて・・・」

ふと腕を見ると血にまみれていた

「くっ、分かった」

「フツ、止めを刺さないか。まあ運に感謝する。それでは、輝也」
ポフッと白い煙が上がり、ストーカーは姿を消す

「くそっ！なんで海が！」

友人であつた海が敵だと言うことにショックを受ける、どうして・
・今までは全て演技なのか？

「輝也・・・」

いや、待て。俺には今力がある。ユナに危害を加える奴を駆逐する
荒魂の力が・・・！

「ふふ、そうだ・・・」

壊してしまおう、ユナの敵になる奴は・・・全て・・・残らず・・・

「輝也！何か変だよ・・・」

腕に抱き着いたユナで俺はふと我に帰る、色々ありすぎたようだ・
・思考がおかしい。

「ごめんな、ユナ。でもこれからはお前を守る。」

右手を握り締める、そうだ、今は――

「ククッ、いいねえいいねえ！素晴らしい欲望に憎悪。人間の感情は実に美味い」

黒い影は学校を立ち去る輝也たちの背中を見て言う。

「それにこの残骸」

壊れたロボットの下に黒い影が広がり、沼のようにロボットが沈んでいく。

「じゃあな、ヒヒッまたいつか」

そっぴい影に消えて行った

『八章 吸血鬼と励まし』

あれからと言うものの、輝也は落ち込んでいる。なんかして私が励ましたいところだけど私は口下手なので躊躇ってしまふ。

さてどうしたものかとユナは悩む、そして一人の人物に辿り着いた、彼女なら何か思い付くかもしれない。私はさっそく彼女のところへ行こうと外へ出た、しかし足を止める。よく考えてみれば私は彼女の家を知らない、どうするかと悩む、ふと鶴野神社が頭に浮かぶが輝也が言うには私のような妖怪は嫌われているそうでも行けない。

ハアと溜め息を吐いていると

「どうかした？溜め息なんか吐いちゃって」

「ひゃあ!？」

突然耳元で囁かれ、ユナは驚きの声をあげる、振り替えてみればそこには咲也がいた

「あ、あ・・・探していたんです!」

「ふふ、何の用かは分かるわ。彼のことでしょ?」

ユナは頷く

「じゃ、場所を移しましょう。本人の家の前じゃあ話しにくいでしょうしね」

それから私は咲也に連れられ、静かな喫茶店に入った。そこでユナは紅茶を、咲也はコーヒーを注文し、それがテーブルに運ばれると咲也は口を開いた。

「それで、何かあったのかしら？」

私は海のことを話した。咲也は時折何かを考え込む仕草をした。

「大体分かったわ、確かに友人が敵なのは辛いわね。私も貴女が敵だったら嫌だわ」

と咲也は色っぽくユナを見つめてみせる。

「そ、それで私は輝也を元気にしたいんです」

「あら、それは簡単よ」

「え、何かあるんですか！？」

「ええ、彼に抱かれなさいな」

ユナの顔が真っ赤になる。

「な、なにを言ってるんですか！輝也とその・・・」

恥ずかしさのあまり言葉が詰まる。咲也は「冗談よ」とコーヒーを一口飲む。

「貴女が輝也に抱かれるなら私が抱くわ」

私は不覚にもドキッとした、すると咲也は私に顔を近づけてくる。何をされるのか、私は目を瞑った。

「貴女は優しいわ、ええ、とてもよ」

唇は触れることが無かった、ホッとしたが少し残念だった自分がいるのが許せない。

「それで、輝也には何をすれば・・・」

「そうね、まずは――」

あれから私は自宅へ帰った、咲也に言われたことをする為である。

しかし恥ずかしい、こんな服装初めてである。

咲也に渡された服、と言うより水着。紺の上下が別れていない水着である、なんでもスク水と言うそうで。

そのスク水を着て私は輝也の部屋のまえにいる、ほんとにこんなので輝也は元気になるのだろうか？

しかし恥ずかしい、なかなか部屋に入る決心が着かない。いや、何もなくて事がいい方へ進む訳がない、私はやけくそにドアを開けた。

「・・・・・・・・」

さっそく輝也にその姿を見られた。

沈黙が続く――そして最初に口を開いたのは輝也だった。

「・・・え、なに。なにしてんの」

「そ、その・・・元気付けようと・・・」

顔が赤くなるのが分かる。輝也はクスリと笑い。

「ふふつ、ありがとな。ユナ」

と私の頭を撫でた。私は自然と笑顔になり、ホッとした。

「よかった・・・元気になってくれて」

「しかし誰の入れ知恵だ？スク水なんか・・・」

「輝也、鼻血鼻血」

「いかんいかん、興奮した」

と輝也はティッシュを鼻に詰める、いつもの輝也に戻ってくれたかな。とユナは安心した。

「そうだユナ」

「はい？」

「ライマーやストーカーが言ってた事件なんだけどさ・・・」

輝也は一息置き

「その事件の犯人はユナではないとして誰がいると思う？」

私は少しの間、考えた。確かに誰が犯人なのか、そもそも吸血鬼が犯人なのか？

「いや、ごめん。変なこと聞いて。夕飯作るか、それとユナ。着替えとけよ」

と輝也は部屋から出る、そう言えば今はスク水とやら水着、水浴びもしないのにこれは恥ずかしい。

「はあ、やっぱり咲也か」

なぜスク水など着ていたかの経緯を伝えると輝也は呆れたように言う。

「あいつは色々変なことを思い付くからなあ、ま、あいつなりに考えたんだろうけど」

とサラダをつつく

「ということは輝也は私のあの姿で元気になるような人ってこと？」
うぐ、と輝也はレタスを詰まらせる。私は急いで水を渡す、それを流し込んで息を吐く。

「・・・ああ、そう、だな。うん、元気出る。スク水で元気出ないのはいないと思う」

「そつか、でもそのスク水っていうのはみんなが着るのにしては小さいね」

「それは大人が着るものじゃないからな」

「・・・つまり子どもが着る水着が大好きなんだね」

輝也はしまったと言いたげな顔になる。

「ああ、そうだよ・・・なんかごめん」

「？」

輝也は食器を片付けてそくささと二階へと上がった。

「水着かー、私も海に行ってみたいなー」

私は吸血鬼、海はもちろん川にすら行けない。太陽が恨めしい。それに吸血鬼は基本的に金槌である、浮き輪でも無ければ溺れてしまう。

「はあ」

とため息を吐く、こんなことをしても太陽が平気になったりするわけがない。

その頃、輝也は

「まさかユナがスク水を着ているなんてな」

ユナは背も小さく見た目も幼いので似合った、興奮した、変態である。

「やべ、まじで可愛かったでしょう」

今や幻想となりつつあるブルマを着せてみるか？などと妄想していると、携帯が鳴る、メールのようだ。

「なんだ、誰からだ」

開いてみると咲也からだった。メールにはこう書かれていた

『そんなに悶えているようならもう平気なようね』

俺は窓を開ける、そこから見える道に咲也がいた。咲也はこちらを見たと手を振った、なんてことだ恥ずかしい。咲也は俺の姿を見て安心したのか暗闇に消えていった。

ああ、そうだ。海・・・いや、確かにショックだった、けど落ち込んだところで何になる？海が戻ってくるわけではないだろ、俺。

「・・・ああ、そうだな・・・」

明日は圭也に会いに行こう、敵なのか否か・・・敵であってほしくないがな。

『九章 人間と人間』

よし、圭夜の家に行こう。と輝也はユナに言う、ユナが頷くと日傘を持たせ二人外へ出た。

セミはもう鳴かず、そろそろ秋だと言うことを知らせている、しかしまだ暑い、汗を拭うとそくささと圭也の家へ向かった。

少し歩けば辺りには大きな一軒家が並ぶ通りに出た、ここに圭也の家がある。俺は慣れた足で圭也の家の前まで辿り着く。そしてインターフォンを押す、ビーとブザー音が鳴ると、暫くして圭也が姿を現した。俺たちの姿を見た圭也は驚いた様子だった。が家に招き入れた。

広い玄関で靴を脱ぎ、圭也のあとを着いていきリビングのソファに腰をかけた、そして向かいに座った圭也が口を開く。

「どうしたんだ？突然に来て」

「いや、連絡を全然寄越さないから何があつたのかなと」

「フツ、なるほどな。だがそれは建前、そうだろ？」

俺は頷いた、圭也も気づいているようだ

「本当は俺が敵か味方かを聞きに来た、だろ？残念ながら俺は敵だ」

「なんでなんだよ、どうしてそんなに吸血鬼を嫌う」

「お前は吸血鬼事件を知っているか？ライマーから聞いたと思うが」

「ああ、ストーカーからも聞いたさ」

「ストーカー？まあいい、あの事件の被害者を教えてやろう」

圭也はポケットから一枚の紙を取り出す

「これは？」

「それは吸血鬼事件を個人的に調べてるサイトのページを印刷したものだ、その被害者を見てみな」

俺は言われた通りに紙を見る、被害者だろうか？人の名前が並んでいる、そこに気になる名前があった

・夜須 剛（47）

・夜須 恵（46）

・夜須 智美（14）

これは俺も知っている名前だった。これは圭也の両親に妹の名前・

「分かっただろ？お前には言わなかったが数日前に俺以外の家族は死んだ、吸血鬼のせいだな」

「それで復讐か、吸血鬼を全員皆殺しするといつつもりか」

「いいや、違う。俺はこれ以上被害が出ないように悪を倒しているだけだ」

「んな！やつてることは変わらないだろ！」

「何を言ってる、街の人を襲う怪人を倒すヒーローと何ら変わりはないだろ」

「ヒーロー気取りか圭也！悪いがこれ以上ユナを苦しめたりはさせない！」

「ヒーロー気取り、そうかもしれない。だが！ヒーローになればいいだけのこと！」

二人は立ち上がる、ユナはオロオロと二人を見る

「圭也！テメーを倒す！」

「立ち上がる障害は誰であろうと潰す、たとえ友人でもな」

ゴッ

二人の頬に互いの拳が入る、そしてすぐに離れ、頬を拭く。

「はっ、お前とまじ喧嘩はいつ以来だろうな！」

圭也は拳を構える

「さあな、ただお前は俺に勝ったことがあるか？」

俺もまた同じように構える。俺にはあのときの荒魂の力がある、決めただろつ、ユナに危害を加えるものは潰す。と、そう自分に言い聞かせる。しかし何かがおかしい、力が沸かない、あの黒い力が

「おらあ！」

そんなことを考えていると圭也の拳が飛んでくる、俺はそれを避け、腹に拳を飛ばす、が圭也はそれを左手で受け止める。そして圭也は蹴りを入れる、ゴロゴロと部屋を転がり、立ち上がる最中分かった気がする。

圭也はユナに危害を及ぼしていない、つまりあの荒魂の力は使えない？だとすればこいつは俺だけを潰すつもりか。

「どうした？本調子はないか？」

「いや、出るさ。ちよつと油断していただけでさっ！」

ダツと走り拳を振り上げる、サツと圭也はガードするがこれが狙い、俺は蹴りを圭也の脇腹に入れる。

「っ！ぐう・・・」

飛び退いた圭也は脇腹を抑える。

「まだまだあ！」

圭也が一步踏み出したそのときだ

「おいおい、なんだ？見せたいものは喧嘩か？」

一人の男が現れる、その眠そうで虚ろな眼は二人を見る

「・・・来てたのか、まあいい。見せたいのはそれだ」

とユナを指差す

「ほう、なるほど話に聞いた通りに可愛い吸血鬼だ」

フツと姿が消えたと思うと男はユナの後ろにいた

「えっ・・・」

男はユナの首に何かを巻き付ける、そしてユナを抱えてどこかに連れ去ろうとするではないか。ユナは抵抗するがどうやら力が出ないようだ。

「おい、デメエ！」

輝也が後を追おうとした

「おっと、誰が行かせるか」

そこに圭也が立ち塞がる

「圭也あー！」

「すまないが《シェリダン》との約束でね」

あの黒い力が沸き上がるのを覚えた、こうなれば容赦はしない。コイツを倒しユナを救う。

右腕が黒い影に包まれる、それを見た圭也はギョツとする。

「お前・・・それは・・・！」

「黙れ」

その右腕を頬に叩き付けた、圭也は吹き飛ばされ壁に叩き付けられた。

「へ、まさかお前、そんな力をね・・・」

「おい、あいつはどこに行った」

「・・・いいだろう、永遠に日の暮れることの無い城、《不夜城》だ」

「不夜城・・・？」

しかし圭也から返事は無かった、輝也は家を出るとシェリダンを探しに向かった。

あれから数分後

「む・・・負けたのか、俺」

眼を覚ました圭也は頬を撫でる、なぜ負けた。あのような悪に。

「なんでっ……」

涙が溢れる、このままではまた犠牲者が……力が欲しい……

『へえ、力が欲しいか』

どこからか声が聞こえ、辺りを見渡すが何もない。

「ああ、欲しいさ、悪から皆を守る力を！」

『フフ……ならあげるわ、闇を浄化する私の力を』

視界が白くなっていく、太陽のような暖かさを感じながら圭也は眼を閉じた。

カーカー

鳥の鳴き声で圭也は眼が覚める、何だったのだろうか。あれは夢だったのか？ふと右腕を見るとほのかに暖かい淡い光に包まれていた。

「これは……」

グッと拳を握り締める、待ってる輝也……！圭也は立ち上がると不夜城へ向かった。

『十章 人間と救出劇』

あれから宛もなくさ迷う輝也、怒りに任せ走り続け、息があがり、ふと我に帰る。辺りを見渡せばそこは焼けた跡の圭也の別荘。

「やあ、若いの、どうかしたか？」

燃え跡の瓦礫に一人の女性がいた

「いや、ちよつと・・・人を探してて・・・」

そうだ、考えてみれば不夜城なんてどこに、クソッ！こつもしている間にユナが・・・

「へえ、不夜城。懐かしいね」

「え？」

俺は不夜城なんて口にはしていない、なのになぜ分かったんだ。

「ん、確かに言ってない。だけど私には分かるのさ。不夜城ねえ懐かしい、私がまだ高天原にいたころは当主とよく遊んだもんだ」

とケラケラ笑う

「なあ高天原って・・・不夜城を知ってるんだな！？」

「ああ知っているさ、なんせ高天原はあたしの故郷さね」

占めた、これで高天原まで案内してもらえれば。

「案内？構わないさ」

「ただ、なぜこの人には考えていることが分かるのか、いやそれより。」

「本当か、なら早速――」

「そいつの言うことに耳を貸しちゃダメよ」

咲也の声が聞こえたと思うと目の前にいた少女目掛けて咲也が突っ込む。

瓦礫はさらに崩れ、土煙が辺りに立ち込める。

「大丈夫？輝也」

いつの間にか隣には咲也がいた。

「おい！なんで突然！」

「あんたは疑問に思わないの？」

土煙のなか、ゆっくりと少女が立ち上がるのが見えた。

「彼女は《覚》、あのままだと心を吞まれてたわよ？」

覚がよく分からないが、心を吞まれるとは？

「まあいいわ、私が不夜城まで案内する」

「行かせるか！あそこは私の思い出の場！私を受け入れてくれたあの方の城！」

「早く！覚自体に戦闘力はないわ！けどかつて山神だったものの、何をするかは分からない！」

「山彦お！！その人間二人を逃がすなあ！」

覚はそう叫ぶ、すると

「了解い！！猫又たちい！！あの山に向かえ！！」

この山の向かいにある山から声が聞こえる。

「さて、あとはあなたが山から出れないようにすればいい」

ニヤーと猫の鳴き声がしたかと思うと大量の猫が輝也たちを囲み、襲いかかってくる。

「私はまた山神となる、この山を使ってね、そしてあの方へ恩返しをするのだ」

「おいおい、なあ咲也、どうする」

襲いかかる猫又を振り払いながら言う、咲也はうーむと悩み。

「ダメだ、分からないわ」

「ちょ・・・」

その時だ

「対妖怪試作型戦闘兵器YASAKA、投入」

ドン！と空から人の形をした機械が落ちてくる、背中のハッチが開き出てきたのは。

「海・・・いや、ストーカー！」

「ククク、吸血鬼に勝つならばまずは妖怪の対処をせねばな。ここにいい実験所がある。行け、輝也。これは友人としてだ」

「海・・・！」

複雑な気持ちだがこれは助かる、二人は山を降り、咲也の案内に従った。

「ちい逃がしたか！」

「おっと、待て。お前さんたちの相手は俺だ、ではテスト開始——
『対妖怪試作型戦闘兵器YASAKA——モード御柱』

腕を筒状に変型させ、辺りにいる猫又を吹き飛ばす。

「ふん、神の力を再現したつもりか人間め」

「力カツ、かつて山神だった身なら分かるだろ、諏訪を奪いし神の妻の恐ろしさ」

「だが貴様は分かっているのか？」

「第二派あ！！烏天狗う！！」

遠くから山彦の声が聞こえる。

「貴様に味方はいない、と言うことを」

「ここは・・・」

咲也に案内され辿り着いたのは鶴野神社だった。

「ここに高天原への扉があるわ、ただ——いえ、ちょうどだわ」

「ちょうど？」

「今は逢魔時・・・高天原に行くことが出来る時よ」

咲也は輝也の腕を引っ張り、社の戸を開け、御神鏡のまえに立つ。

「お、おい。これで行けるのか？」

「・・・目を閉じて」

「うん・・・」

言われた通りに目を閉じる。それと同時に目を閉じても分かる光が二人を襲い、ぐらりとよろけるような方向が分からなくなる感覚に襲われた。

どのくらい経ったか、目を開けるとそこは鶴野神社の社ではなく、見知らぬ森だった。

「着いたわね・・・」

やけに静かな森を歩くと突然明るくなった、太陽がそこにあるかのように。咲也はどこからか傘を取りだし体を守る。よく見れば城がある、これが――

「これが不夜城よ、やれやれ、ここに来る吸血鬼は私とユナで初めてじゃないかしら」

いざ城へ入ろうとした、そこに人が倒れているのに気づく。

「な、何があったんですか!？」

まだ意識はあるようだ、輝也は男を城壁にもたれさせる。

「何があったんですか・・・」

男はゆっくりと答えた

「ユリックが・・・危ない・・・あの野郎・・・他にも吸血鬼を・・・とにかく、少年、俺が人間に頼むのは癪だが、ユリックと、あの吸血鬼を助けてくれ!」

そう言う男は気を失った、ユリック?それはいつの日にか聞いたユナの姉では・・・

「行こう、咲也」

「ええ、そうしましょ」

古城に踏み入れた二人はかび臭い臭いにムツとする。城内はやけに静かで人がいるのか疑わしいぐらいだった。

「覚ってやつがいうにはここに主がいるようだが」

「主ねえ、ここは数百年前に無人の城のはずよ」

「手当たり次第に探すか？」

「ええ、そうね。私は地下に、貴方は上をお願い」

「よし分かった、行ってくる」

そっつい二人は別れた

「暗いなあ・・・」

この城、やけに暗い。外は朝のように明るいつのに窓から一切の光が入ってきていない。不気味に思いつつ手当たり次第に進むと

小さな光が見えた、占めた。と近づくとそれは蝋燭だった、誰かがさつき点けたのだろうか？まだ新しい。いやこれはありがたい、使わせてもらおう。と蝋燭を手にし、探索を続け、蝋燭があれば火を灯していく。そんなことをしている内に最上階にある大きな扉の前まで来ていた。

ゆつくりとその扉を開ける、そこは誰かの部屋のように、ベッドや本棚が置かれていた。そのベッドに一人、少女が眠っている。

「あの・・・」

返事はない、熟睡しているようだ。輝也は少女に触れてみようと思いに手を伸ばす、手が僅かに触れたときだ。ブワツとシーツが舞ったと思えば少女の手は輝也の首を掴み、持ち上げていた。

「誰？あなた・・・」

「がつ・・・ぐつ・・・」

「・・・侵入者、じゃないようね」

パツと手を話す、ドサツと床に落ちた輝也はゲホゲホと咳き込み、少女を睨む。

「ごめんなさい、人間。ところで何か用かしら？」

「ユリック！ユナが！ユナが危ない！」

「え・・・ユ・・・ナ・・・？」

どういうことか思っていた反応ではない。

「ごめんなさい、私ちよつと記憶が・・・けど、ユナ、何か思い出そうだわ・・・大切な・・・」

「そうか、記憶が・・・まあいい。早く！あいつは何をしでかすか！」

輝也はユリックの腕を掴み、階段を降りだす。

「ちよつと！何処へ行くのよ！」

「最上階まで来てあんたがいた、奴は地下だ！」

咲也・・・無事でいてくれ！

「・・・ここが高天原、か」

朝日のように眩しい光のなかに佇む城を眺めて圭也は言う。

「さあ、悪を潰そうではないか」

グツと右手を握り締める、この右手に宿った力は・・・悪を消すことが出来る。

「やるしかない、待ってる。輝也」

「うわ、なんだこりゃ」

地下のある部屋に来た輝也は驚いた、壁や床は砕かれ、ボロボロになっている、誰かと戦ったのだろうか？

「咲也・・・」

彼女のことだ、だが本当に大丈夫だろうか。「ちょっと、ここは私の城よ。なんなのこれは」

「あのな、ここに一人吸血鬼を利用するやつが現れた、そいつはユナを拐い、ここに逃げてきたんだ」

「なるほど、この荒れ模様だとほんとに地下ね」

ユリックはずんずんと前を進む、こんなにも暗いのによくもまあ進める。

「吸血鬼は暗いところでも目が効くのよ」

「そうですか」

さらに地下へ、地下へと階段を下る二人、ふとユリックの足が止まる。

「ここが最下層、のようね」

重々しい鉄扉を開けると急に明るくなった、それは太陽の光ではなく、人工的な電気の光だった。その光のなかにシェリダンがいた、そしてその後ろには、ユナ、咲也、そして――

「清……香……？」

清香が捕らわれていた

「やあ、ようこそ。君たちはこの侵入者たちの仲間だな？」

「ああ、そうさ。返してもらおう」

「いやそれはダメだ、私はこの吸血鬼二人と――その吸血鬼に興味がある」

「じゃあ清香も含めて力づくで奪ってみせる！」

黒い影が右腕を包む、それを見たシェリダンは悲しげな顔になる。

「……それは人が持つべき力ではないのを知っているのか？少年」

突然シェリダンの腕が伸び、輝也を襲う。輝也は不意を喰らい吹き飛ばされる。

「人が持つべきではない……？知らねえな！ユナを守る力に所有権はない！」

さらに黒い影を強くする

「……そうか、その《マガツチ》の力に吞まれる運命を選ぶか。

ならば少年、貴様の目を覚まさせてやろう！自らを改造したシェリダンに勝るものはない！」

再び腕を伸ばしてくる、それをサツと避け一気に近づく！！だがシェリダンの腹から砲台が現れ、弾が打ち出される。体を襲う激痛、だが死んではない、見ればユリックが弾を受け止めていた。

「ユリック！」

「ったく、ユナを助けるんじゃないの？」

弾を投げ飛ばし、シェリダンに歩み寄り、砲台をへし折る。そして腕をしっかりと掴んだ。

「吸血鬼、何のつもりだ！」

シェリダンは振りほどこうと動くが吸血鬼の力には敵わないようだ。

「さあ！今よ！」

「おおおお！！！」

右腕を包む黒い影がだんだん大きくなる。そしてその渾身の右腕をシェリダンに叩き込んだ。

ドオン！と激しい衝撃によりシェリダンは気を失った、腕からは様々なコードが剥き出しになっている、恐らく動くことはないだろう。

「ユナ！咲也！清香！」

輝也は急いで三人を解放する。

「ユリック！思い出せ！ユナだ！」

しかし返事はない、ユリックはその場に倒れていた。

「ユリック――」

「シェリダンを倒したか」

そこに圭也が現れる。

「圭也あ！」

「さあ輝也、お前の悪を浄化する時だ！」

右腕から強烈な光が発せられる。思わず目を瞑る。

「さあ、始めようか。あのあと与えられた悪を滅ぼす太陽の力《八咫鳥》お前は勝つことは可能か？」

『十一章 人間と安堵』

「さあ全て、燃えてしまえ、邪な心も、吸血鬼も、妖怪も全て！この八咫鳥様の太陽で！！」

圭也は拳を床に叩き付ける、そこから熱風が吹き荒れる。しかし黒い影が盾となりそれを防ぐ。

何としてもユナたちを守らなければ。俺は圭也に向かって突っ込み、拳を叩き付けた、しかしそこに圭也はいない。

「『八咫鳥キック』！」

上から圭也が蹴りを入れてくる、輝也はそれをガードするが、まるで三回蹴られたかのような衝撃にガードを崩してしまう。

「三本足の鳥、それが八咫鳥。知らないのか？」

「知らねえな！つたく！何処までも俺たちは仲がいい！」

今度は黒い影が輝也を包む。

「見せてやる、俺にユナを守る力をくれた神、《大禍津日神》の力！」

黒い影に包まれた輝也はもはや人ではなく、鬼のような姿をしていた。

「皆を守る力、八咫鳥様に敵うと思ってか！」

圭也の背中から鳥の羽根が現れ、空を飛ぶ。

「さあ、輝也。諦めてくれ、俺はお前を救うんだ!」

右腕に光が集まっていき、その光は徐々に大きくなる。

「太陽を泳ぐ龍!」
プロミネンス

その球体を叩きつけようとしたときだ。一筋縄の黒い影が圭也を貫く。

「なっ・・・」

光は消滅し、圭也は床に落ちる。その一筋縄の黒い影はユナだった、しかし様子がおかしい。

「不味いわね、彼女、そうとう怒ってるわよ」

いつの間にか起きていた咲也が言う。

「怒ってる?」

黒い影は霧散し、右腕に入っていく。

「恐らくユリックが倒れているのは圭也の仕業と思っているようね」

「このままだとどうなる?」

「前にも言ったでしょ? 彼女は力の使い方を知らない。このままじ

「やあ手に負えなくなるわ」

「・・・いつつ・・・何が・・・」

清香が目を覚まし、辺りを見る。

「よう、久しぶりだな」

「輝也・・・！」

ドオオン！！

激しい衝撃と共に圭也が壁に叩き付けられる。輝也は何かあったのかを説明した。

「なるほど、なら私の御札で力を封じることが出来ればあるいは・・・！」

「急いで、精神状態には《Furor》《Insane》《Wahnsinn》がある、一番危険なのは——」

言いかけたとき、ユナと圭也がこちらに飛んできた。

「とにかく！まだユナはFuror！間に合うわ！」

「行くぞ清香！」

黒い影は剣のように鋭くなる。清香は御札を投げる、その御札は圭也に貼り付き動きを止める。

「こ、これは！」

「急いで！神様の力を止めるほどの力はないわ！」

「清香あ！貴様あ！」

ドツ、輝也の剣が圭也の胸を貫く。

「・・・俺は死なない、悪を・・・滅ぼすまで・・・は・・・」

ドサツと倒れる、悲しむ暇はない！次はユナだ！御札は既にユナに貼り付き動きを止めていた。

何をすればいいか分からない、とにかく――

・・・俺はユナを抱き締めた、ユナは腕のなかで暴れる、その気になれば俺を殺してでも脱け出すことは可能だ。

「――驚いたわ、あの状態に陥った吸血鬼を大人しくさせるなんて」

咲也が感心していたときだ、ユナは輝也の肩に噛み付いた。

注射針を刺したようなチクリとした痛みが走り、次は血が吸われていくのが分かった。

ああ・・・吸血鬼に血を吸われると・・・どうなるんだっけ・・・

薄れゆく意識のなか、輝也は考えた。

あれから何日経ったか、ようやく輝也は目を覚ました。

「グッモーニン輝也」

「……………咲也？なんで……………ユナは？」

「ふふ、自分よりもユナだなんて、貴方は優しいね。大丈夫、あなたの隣で寝ているわ」

隣を見るとユナが幸せそうに眠っている。ああ、あれは夢なのか？いや違う、俺はあのとき圭也を……………

「すまない……………圭也……………」

涙が溢れる、あの時は敵とはいえ、友人を殺すなんて……………

「……………今は泣きなさい、友人の為に、けど、貴方のしたことは間違っていないわ」

そう言うと咲也は部屋を出た。

「よかったの？一緒に泣かなくて？」

部屋を出た咲也にユリックが声をかける。

「泣かないわよ・・・」

「吸血鬼と人間でも仮には友達、悲しいはずよ」

「友人のまえで泣き顔は見せれないわよ」

咲也は目をゴシゴシと拭いた。

「ところで貴女は思い出したの？」

「ええ、思い出したわ。私は《シヴァ》に記憶を壊されたってことね」

「許すの？」

「ええ、彼反省してるみたいだし」

「そう。ところで貴女たちを襲ったヴァンパイアハンターはシェリダンではないのね？」

「ええ、違うわ。もっと危ないやつよ」

「・・・へえ、これは他の吸血鬼たちにも注意するように言っておかないと」

「あと吸血鬼事件はどうなったの？」

「さあね、ただ私の知り合いに犯人はいないってことが確かよ」

「そうかしらねえ、ま、あんた見た感じ古参の吸血鬼だから変に動けないか」

「それもそうね、ふああ、寝ましよ、疲れたわ」

「そうね、そうしますか」

二人は適当な部屋に布団を持っていくとそこに敷き、眠りに就いた。泣き止んだ、もう嘆かない。気持ちはスッキリした。

輝也は部屋を出る、隣の部屋が開いているので覗いてみればユリツクと咲也が寝ていた、ユリツクはどうするのだろうか、行く当てはあるのか。そう言えば海はどうなったのか、あの山に言ってみるか。

外に出れば朝日が昇り始めていた。輝也は真っ直ぐあの山へ進む。
——暫くしてあの山に到着する、そこには覚も海も誰もいなかった。誰が勝ったのか分からなかった。

瓦礫の山を見ると一羽の烏が止まっていた、その烏を見てギョツとした、その烏の足は三本あるのだ。それは圭也が言っていた八咫烏そのものだった。

暫く八咫烏と見つめあっていると八咫烏はフイとそっぽを向き、何処かへ飛び去った。何だったのか、海のことは今日学校に行けば分かるだろう。

そうと決まれば輝也は家に戻る、朝食の用意をしなければ、ユナが起きてしまう。

立ち去る輝也の背を見詰める影が一人、その影はニヤリと口元を歪めると森へと消えていった。

『十二章 吸血鬼と吸血鬼と吸血鬼と』

朝食が出来る頃、ユナが目を擦りながら起きた、そう言えばユナに血を吸われたな。しかし何ともない、これはどういうことか、あとでユリックか咲也に聞こう。

「・・・おはようございます」

あの時のことは覚えていないだろう、ライマーのときもそうだった。

「おはよう、朝食出来てるよ。そうだユリックと咲也も」

ユナは首を横に振った

「お姉ちゃんはいいわ、私が人間といるのを見たら・・・」

「ああー・・・いや、大丈夫だろ」

根拠はないが何故かそう思えた。

「その、助けに来てありがとうございます・・・」

「いやいや、どうも。お姉ちゃんも見つけたしよかったな!」

ユナは頷くと朝食を食べ始めた、こちらも朝食を食べ終わると学校へ向かった。学校に圭也はいなかった、それもそうだ、彼はもう・・・

思い耽っていると。

「よう、あれからどうなった」

「海・・・生きていたか」

「フフツ、俺の作品に負けはない」

「あの妖怪はどうなったんだ」

「さあな、逃げた、別に殺す理由もないしな」

「そうか」

「あのあと何があったかは大体分かる、しかし圭也がな・・・」

「ああ、でも——」

俺は瓦礫で出会った八咫鳥を思い出した。

「まだ生きている、そんな気がしてならないな」

「ほう、それは面白い、死んだ人間が蘇るか。それはゾンビかキョ
ンシーか吸血鬼か」

「・・・なあ海、お前は何者なんだ？」

「・・・なに、古くから人間と関わりがある者さ」

人ではないと言うか

「それに俺は元々高天原にいた身だ、あそこには妖怪や神々がウジ
ヤウジヤいる。俺はその妖怪の一人の——」

そこまでいいかけたときだ、チャイムが鳴り響き、海は「まあいいじゃあな」と自分のクラスへと帰って行った。

「えー、最近この辺りで不審者や誘拐事件が多くなっている。みんなも気を付けるように――」

担任がそんなことを言っている、吸血鬼事件のことだろうか、それに事件はここ周辺でしか起きていない、つまり犯人はこの近くにいる？

「――天野、おい、天野」

「へ、あ、はい！」

「夜須はどうしたんだ？」

「え、あ・・・休むと・・・」

「・・・そうか、分かった」

と言うと担任は出席簿に休むことを記入する。

授業が終わり、放課後となる。不審者対策とし帰宅路には職員が何人か見張りをしている、これを逆手に取れば吸血鬼事件の犯人と遭遇出来るのでは？と思った矢先。

「やめときな、危険しかない」

誰だろう、一人の少女が声をかけてきた。

「やめときなつて・・・何考えてたか――」

「吸血鬼事件でしょ？それを知ってるってことは貴方・・・」

「待つて、なんであんたも知っているんだ」

もしかするとコイツは敵なのかもしれない、一応警戒しなければ。

「ああ私？ちよつと呼ばれて来たのよ」

「誰に？」

「咲也つて名乗ってるわね、今は」

咲也・・・？あの咲也だろうか、それにそう名乗ってるって・・・

「まあ貴方とは味方のようね、よろしく、私は《ネラプシ》わざわざ外国から来たのよ寢床を紹介してちょうだい」

「ちよつと待てなんだ突然寢床を紹介しろだなんてそんな急に言われても」

「あら、ならこの町の住人全員を私の眼で殺してもいいのね？」

ネラプシの紅い眼が嫌に目につく、仕方ないこんな恐ろしい娘、咲也に文句を言つてやる。

「仕方ねえ、俺の家に行こう、まだ咲也がいるハズだから」

ふと思った、俺が家にいないあいだユナは何をしているんだろうか。

こうして自宅に帰ると自室が騒がしい、何かと部屋を覗いてみると。

「そらっ最後の切り札！」

「奪還！」

「何をするだー！」

ユナと咲也とユリックが大乱闘のゲームをしている、しかもなんだお菓子はジュースを並べて、誰の部屋だと。

そう呆れていると。

「面白そうじゃん！混ぜて混ぜて！」

と、ネラプシは部屋に入っていく。

「お、ネラプシじゃん。来てたの」

咲也が最初に気づき彼女を紹介する。

「彼女はネラプシ、私の友人でね、わざわざ東ヨーロッパから来てもらった」

「よろしく！」

なんだ、やけに機嫌がいいな、あいつ。あ、加わってゲーム شدした。仕方がないので俺は別の部屋、もとい親父の部屋に行き本棚から適当に本を取り読むことにした。

しかし、この家がこんなに賑やかなことはあっただろうか、いや無いな。何となく嬉しい気持ちに顔をにやつかせ、本のページを開き読み始める。

「・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・！！！」

あれから数分、騒がしい、なんて騒がしいのか、女子は、いや吸血鬼どもは。

「夕飯はニンニク料理オンリーにしてやろうか・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静かになった。デビルイヤーは地獄耳か。

「とりゃー!!」

「あ、そこスカーレットデビル」

「マジ!? 繋がるのそれ!」

「ネプラシとユナも仲良くなれてよかったわね」

ユリックと咲也は二人仲良くゲームする姿を見守っていた。

「おい、夕飯出来たぞ!」

下から輝也が呼ぶ声がする、吸血鬼たちはゲームを止め、一階の食卓へ向かった。

食卓にはハンバーグが並べられており、みんなはテーブルを囲むように椅子に座り、「いただきまーす!」と元気よく――

「ちょっと待て、なんで当たり前のように咲也たちがいるんだよ」

「あら、いいじゃない。別に」

「よかねーよ、お前は自分の家があるだろーが」

「まあ、ケチね、私は今起きたばかりよ？」

「何気に全員の分用意してるじゃん」

ネラプシがそう言う、なんか癖で作ったんだよ！言わせんな恥ずかしい。

「まあまあ、ご飯ぐらい楽しくさ、ね？」

ユリックがその場をなだめる、確かにそうだがこのままだと付け上がりそうだな。

「うめえ、やべえ、うめえ」

静かに食えんのか、咲也は。そーいや咲也に聞きたいことが。

「なあ、あの時俺はユナに血を吸われたよな。何ともないんだが」

「ああ、それ・・・はね・・・ゲホツゲホツ！この米いいところのだな、吸血鬼になる・・・にはっ！喉につ！」

「食ってから話せ！」

何なんだ！昔からこんな奴だったが何も変わってないな！コイツは！

「私・・・輝也の血を・・・？」

あ、不味かったかな。ユナは気まずそうに顔を伏せる。

「いやいや！俺はこの通り何ともないし仕方なかったし！」

「うう・・・ご、ごちそうさま・・・」

そう言つとそくささと階段を上がり部屋に入つたのだろうか、ドアを開ける音が聞こえた。

「やれやれ、別に気にしてないのに」

「あの娘はねえ、血を吸うことが嫌いなんだよ」

ユリックはそう言う、俺が頷くと話を続けた。

「私は吸血鬼であることに誇りを持って生きた、でもユナは人間らしく生きたいのさ、ま、私がそれを許さなかったけどね」

「何故ドヤ顔なんだ、それに別に吸血鬼らしく生きる必要なんてあるのか？」

「そりゃ吸血鬼として地位を示さないとね、嘗められるわよ。高貴なのが吸血鬼ってイメージが強いからねー」

「あら、貴女はまだ古い仕来たりに従つてるの？」

「何よ咲也、私はあのブラド三世の血筋のハズよ」

「え・・・・・・・・そうだったかしら」

「え・・・・・・・・」

「・・・私は古参の吸血鬼だけど・・・貴女がブラド三世の血筋ではなかったハズよ」

「ごめん、なんか勘違いしてたみたい」

いや、俺に謝られても

「フフ、とんだ勘違いね？妹さんに謝りに行ったら？」

「そうするわ、ごちそうさま」

そう言うユリックはユナのところへ向かった。

「ま、出鱈目だけどね。彼女がいつ、どこで生まれたか知らないものの」

この吸血鬼恐ろしい。

「さて、私もごちそうさま。ネラプシは私のところへ住まわせるわ」

「よろしく願います」

どうでもいいが食うの遅いな。

暫くしてネラプシが食べ終わり、俺が食器を片付けていると。

「あれ？ユナ来てない？」

ユリックが来た、どうやらユナを探しているようだ。

「部屋にいなかったのか？こつちには来てないが」

「いなかったわ。うーん・・・吸血鬼は鼠や蝙蝠や狼、はたまた霧にまで化けれるからなあ・・・」

「腹減ったらその内出てくるさ」

「今さっき食べたじゃない」

「そうだったな」

洗い物を済ませ、ユリックと共にユナを捜すことにした。おい、なに俺の部屋で勝手にゲームしてる、この二人は。咲也とネラプシも連れ、ユナを捜すが一行に見つからない。これは参ったと困り果てていたときだ、ユリックが何かを見付けたのかこちらへ呼ぶ声があった。

「どうした？何か見付けたか？」

ユリックが指差す先には窓、しかも開いている。

「こつから逃げたのか」

「違っわ、窓の縁を見て」

俺は窓の縁をよく見てみた、そしてギョツとした、窓の縁には血がびっしりと付いているのだ。

「まさか……！これは……」

真っ先に反応したのは咲也だった。

「何か知っているのか？」

「……ええ……私は彼女と直々争うことを想定して助っ人としてネラプシを呼んだの。でもまさかユナが誘拐されるなんて……」

「ねえ！あいつは吸血鬼でもお構い無しなの！？」

ネラプシが咲也に問う、咲也は顔を青ざめながらも答えた。

「あいつは可愛ければ誰でも喰う奴よ……ユナが危ない！」

咲也は家を飛び出すとどこかへ走り去った。

「どどどどっしょー！」

ユリックはあわめふためいている。落ち着け、あいつって誰だ。それに可愛ければ喰う？どんな化け物だそれは。

「……とにかくみんな、ユナを捜しましょ！」

俺とユリックは頷き、それぞれバラバラになりユナを捜し始めた。

『十二章 吸血鬼と吸血鬼と吸血鬼と』（後書き）

誤字脱字がありましたら報告をお願いします。

『十三章 吸血鬼と神』

あれから走り回ったがユナの姿はなし、それに手掛かりもない状態である。

「くっ・・・どうする・・・」

「お困りのようだな」

背後から声がする、この声は――

「やっぱり、海、お前か」

「フッフ・・・あの吸血鬼を追い掛けてお前の家を尋ねたときこんな夜だったな」

「なっ・・・あれ、お前だったのか!？」

「気づかなかっただろ？それより何か捜していたようだが？」

「ああ、そうだ。ユナがいないんだ!」

「ユナ？ああ、あの吸血鬼か。腹が減れば戻ってくるんじゃないのか？」

「飯は今さつき食った。それになんかヤバそうな奴に連れ去られたみたいで・・・」

「ほう、ヤバそうな奴・・・それはここ最近この辺りを怖がらせて

いる吸血鬼事件の犯人ではないかな？」

「知っているのか!？」

「いや、知らない。が臭うんだ。血の、何人もの血が混じった臭いが」

スンスンと空気の臭いを嗅ぐ海、何も臭わないが。そして臭いのするほうへ歩いていく、俺はそれに着いていった。

「俺は妖怪だ、鼻は効くさ」

「そうそう、何の妖怪なんだ」

「河童」

思わずポカンとした、河童？河童と言えばなんか鱗付いた半魚人見たいな――

「それは人の勝手な想像だ龍之介って河童の師でな・・・と言っても知らないか、着いた。この辺りから臭う」

そこはごく普通の一軒家、本当にここから臭うのだろうか。

「血の臭いしかしないな、どんな危険があろうとも耐えて見せるんだな」

そう言うとき海は夜の闇に消えた。家に入ろうか悩んでいると向こうから狼が二匹こちらに近づいてくるではないか。何故こんなところに狼が！すぐそばにあった簾に手を掛ける、すると一匹の狼がこち

らに飛びかかってきた！

「ひいひい！」

箒で撃退も出来ず、尻餅をつく、その上に狼は乗り、口を開けた。恐怖に目を閉じ、食われる！そう思ったときだ。

「キャハハハハ！本気で怖がってる！」

どこかで聞いた声だ、目を開けてみると目の前にはネラプシがいた。

「フフ・・・まさか・・・あそこまでビビるなんて・・・ククッ」

後ろにはユリツクが笑いを堪えている。

「というか狼は」

「もしかして知らない？吸血鬼は狼にも化けるのよ？」

「言ってたじゃない」

ああ、あの時か。聞き流していた。

「私たちは狼に化けてみたの、するととてもない血の臭い！それを辿ってたらここに着いたってわけ」

「でもただの一軒家ね」

「でも早く行きましょ！あいつはヤバイわ！」

「待て、咲也は!？」

「知らない!先に行ってるんじゃない？」

そう言つと問答無用にドアを開けるネラプシ、鍵掛かってないのか。

家に入ると真つ暗で誰もいないように思えた、だが。

「なんだこの臭い……」

むせかえるような血の臭い……気持ち悪くなりそうだが耐え、電気を点ける。

「うわ……」

思わず身を引いた、そこは血にまみれた廊下が続き、地下に続くであろう階段があった。

「ここね、絶対にこの先だわ」

ネラプシがズンズンと先に進む、何も恐れない度胸が羨ましい。

ネラプシは黙々と階段を降りる、どこまで続くのか、しかし私は彼女を知っている。咲也でも勝てるか分からないような相手だ、だが仕留めなければこの街、いや、この国が危ない。

階段が終わり、また長い廊下が続く。その廊下を真つ直ぐ進むと扉があった、迷うことはない、勢いよく私はその扉を開けた!

そこは床一面、壁一面に広がる血で紅く染まった部屋だった。その

部屋の中央にバスタブがあり、一人の女性がワイングラス片手に浴槽に浸かっている、だが浴槽には湯ではなく血が溜められている。

「あら、ハロー、よくここが分かったわね」

と彼女はワイングラスに注がれた血を飲み干す、天井からは血が滝のように流れ落ちており、彼女は血の滝にワイングラスを傾けた。

「会いたかったわ・・・ユナはどこ!？」

「・・・ユナ・・・ねえ、処女の血を求めて偶然捕まえた吸血鬼のことね? 安心しなさい、彼女はデザート、お楽しみよ」

「おい、なんだよあいつは・・・」

輝也が聞いてくる。

「彼女是最狂の吸血鬼と呼ばれている《バートリー》・・・処女の血を求めて何百もの人間を殺してきた化け物よ」

「あら、化け物だなんて。同じ吸血鬼なんだからさあ」

とワイングラスに注がれた血をくいと飲む。

「吸血鬼の血もまた美味しいものね」

と言うと指を鳴らす、すると天井から縛られた咲也が現れたではないか、体からは血が溢れている。

「咲也あ!」

またバートリーは指を鳴らすと咲也は血に染まった天井へ吸い込まれていった。

「バートリー！ユナはどこよ！」

ユリックは言う、バートリーはふうと溜め息を吐き。

「だから安心しなよ、彼女はデザートだからさ」

パチンと指を鳴らす、すると今度は地面から鉄の筒が現れる、そのなかにはユナが縛られていた。

「彼女はこの《アイアンメイデン》でじっくり料理してあげる、だから安心しなさいな」

「ネラプシ！ユリック！ユナと咲也を助けるぞ！」

輝也がそう呼び掛ける、だがネラプシは震えていた。

「どうしたんだ、いつもの強きはどうした！」

「咲也が咲也が・・・」

「くっ、行くぞ！ユリック！」

腕に黒い影を纏う。ユリックは怒りに任せバートリーに突っ込む。が、床一面に広がった血が一人でに動きだし、巨大な拳となってユリックを吹き飛ばした。

「あらあら、私とやりあうつもりね？」

手で浴槽の血を掬い、うつとりと眺める。浴槽の血が一人でに動きだし、バートリーを浴槽から出す、そして血はバートリーの体を包み込み、紅いドレスへと姿を変えた。

「っ……！」

ネラプシはバートリーを睨み付けた、だがネラプシの前に血の壁が現れる。

「無駄よ、あなたの眼で私は殺せない」

ネラプシは何度も試すがその度に血の壁が邪魔をする。

「お前が圭也の家族を……」

「圭也……？ああ、あの時の少年かしら？ほんとには彼の妹に用があっただけだね、邪魔だったからみんな殺したわ」

「そうか、なら友人に代わって敵討ちと行こうか！」

拳を地面に叩きつける、そこから黒い影がバートリー目掛けて噴き出される。バートリーは微動だになかった、黒い影は血の壁によって塞がれ、影は消えた。

「神の力を持ったとしても所詮は人間、ね」

バートリーは腕をドリルのように変形させ、こちらに突っ込む。その早さはまさに一瞬だった、黒い影が身を守ったが僅かにドリルの

先端が腹に刺さる。

「ぐう……まだだ！」

体から黒い影を呼び出す、黒い影は針のように尖り、バートリーを次々突き刺す、だがそれは全て血の壁によって防がれた。

「悪あがきは済んだかしら？」

今度は腕を獣の口のように変形させ、ガバアと人一人分丸飲み出来るぐらいに開く。しかし、黒い影がバートリーの腕を貫いた。獣の口は消え、腕からは血が滴り落ちる。バートリーはそれをただ見ていた。

「ふうん、やるじゃん」

バートリーは黒い影を掴むと枝を折るかのように容易く折ってみせた。

バートリーは飛び退くと手を広げ空を仰ぐ、すると部屋中の血は煮えたぎり、紅い湯気が部屋を覆う。視界が悪い、周りは紅く何も見えない。

ヒュッ

何かがこちらに向かってくる音がした、それは紅い血だった。紅い血は縄のように輝也の体を縛る。そして腕をドリルに変化させたバートリーがこちらに歩いてくる。これはまずい、何とかして縄を切らねば、と影を操って縄を切ろうと試みるが全く切れない。ここま
でか……と諦めかけた時だ。

「よくもやってくれたわね」

「輝也は殺させないよ」

ユリックとネラプシがバートリーに殴りかかる、バートリーはもろに拳を受け、吹き飛ばされる。やはり、あの血の壁はバートリーの意思で現れるものであり不意を突かれれば対処仕切れないようだ。

「全く、吸血鬼は目がいいから困る」

口を拭い、ゆっくりと立ち上がり、パチンと指を鳴らした。

ザバア

すると血の床から鉄の筒、アイアンメイデンが現れた、それは縛られた輝也を挟むように開く、なかには鋭い棘が敷き詰められている。

「まずい！」

ユリックがアイアンメイデンを破壊しようとしたが

「死ね、人間」

バートリーが腕を降ろすのが早かった、アイアンメイデンは閉じ、なかの輝也を貫く。

「ぐああああー!!」

中から輝也の悲痛な声が聞こえる。

「あーはっはっはっ！！愚かな人間！貴様らは所詮は食糧に過ぎないんだよ！」

高らかにバートリーは笑う、ネラプシは再び眼を使った、だが床から血が飛び出し眼を封じる。

「ぐう……眼が……」

拭き取るも拭き取れない、こびりついているように。

「くっ！バートリー！」

ユリツクはバートリーに駆け寄ろうとしたが、床から腕が現れユリツクの足を掴む。ユリツクは転け、地に伏せる。

「そろそろ最狂じゃなくて最強を名乗ろうかしら？オホホホ！」

バートリーはユリツクの頭を踏みつけ笑う、ユリツクはそのバートリーを睨むことしか出来なかった。

ゾクリ

バートリーは嫌な汗が伝うのを感じた。恐ろしい殺気、これはアイアンメイデンからする。まさか、まだ死んでいないと言うのか？

ボコン！

アイアンメイデンになかから拳を叩きつけたような突起が。するとギギ……と僅かにアイアンメイデンが開いた、その隙間に指が入

り、中からこじ開け始めた、中からは血塗れの輝也が現れる。

「人間っ！しぶとい奴め！」

一瞬で輝也の元に駆け寄り、腕をドリルに変化させ貫こうとする。
だが輝也はドリルを掴んだ、そして

「ぐああああ!？」

焼けつくような音と共にドリルは溶け、腕の部分を包んでいた血は無くなった。

「・・・神ガ負ケル・・・？笑止！」

「人間・・・いえ、今の貴方は・・・」

黒い影が輝也を包み始める、全身を包み込んだ黒い影はまさに人影だった。

「神・・・我ガ名ハ、大禍津日神・・・貴様ニ災厄ヲ見セテクレヨウ」

ガシツと輝也、いや大禍津日神はバートリーの首を掴み持ち上げる、そしてそのまま地面へ叩きつけた。床に溜まる血は噴水のように飛び散り、床にクレーターを作った。

「己ガ起コシタ愚行・・・死ヲ持ツテ後悔セヨ・・・」

腕を退けてみるとそこにはバートリーがいた、まだ息はしているだが体を纏っていた血のドレスは吹き飛びどう見ても戦える状態では

ない。

「・・・何故殺サヌ、アノ女ニ危害ヲ及ボス者ニハ容赦ハシナイ筈デハ無カッタノカ？」

大禍津日神は自分の右腕に問いかける、すると右腕は自分の顔を殴ったではないか。

「・・・成程、貴様ハ慈愛ニ溢レテイル、ダガソレガ甘エデモアル」
黒い影は霧散し、輝也は元に戻ると床に倒れた。腕の拘束が無くなったユリックは輝也に駆け寄り、まだ息はある。

ネラプシも眼に付いた血が取れ、輝也に駆け寄り、すると床からアイアンメイデンが現れた、中にはユナが。そして天井からは咲也が落ちる。

「咲也！咲也！」

「・・・ん・・・ネラプシ？」

「よかった・・・生きてた・・・」

ネラプシは咲也を抱き締めた、咲也はネラプシを撫でてあげた。

「よかった、生きてるわねみんな」

ユナと輝也を抱えたユリックが言う、ネラプシは咲也に肩を貸し、この恐ろしい場所から帰ることにした。

「やれやれ、参ったわね。あんなところで本気だなんて」

暗闇の中、バートリーは逃げるように家を後にしていた。この島国では信仰が絶え絶えになっているから神を恐れることはないと聞いたが嘘だ。酷い目にあつた

「あーあ、次はどこで血を吸おうかしら。それとももう隠居しちゃおうかな」

なんて呟いていると。

「——その前に俺から痛い目に遭うのはどうだ？」

一人の男がバートリーに言う、暗くて顔はよく見えない。

「あら、痛い目見るのはどちらかしら？人間」

男はフツと笑うと手の平に球体を出した、その光は辺りを明るくした。

「……貴方は！」

バートリーは知っていた、男は誰なのかを。そしてバートリーの視界は白い光に包まれた。

『十三章 吸血鬼と神』（後書き）

誤字、脱字があればご報告お願いします。感想等もどんどんお願いしますね。

『十四章 吸血鬼と安息』

あれから数日経ち、いつもの日常？が帰ってきた。傷は癒え何事も無かったかのように腕や足は動く。そんなある日咲也が言った。

「海行こうか」

「今は秋だ、それに吸血鬼だろうが」

「いや泳げないだけで」

「海つたら外だろうが、太陽どうするんだ」

「あ・・・」

「はあ・・・」

「ごめんねー」

「うぜえ。ああ、それはそうとなぜ俺はユナに噛まれても吸血鬼にならなかったんだ？」

「吸血鬼はね、神聖な、神の加護があるものは苦手なのよ、聖水とか聖餅とかね」

「えーとつまり？」

「貴方はマガツチの力を持ってるでしょう？厄の神とは言え神は神。

吸血鬼なんて穢れた存在にはならないわ」

「なるほど・・・神ね」

「海行けないわねえ・・・プールにしようかしら」

コロコロと話題が変わる奴だ。

「室内プールなら大丈夫だな、だけど秋だぞ」

「温水プールでしょ？問題ないわ」

まあ温水プールでも貸切状態だろう、誰が秋にプールに行くか。

「分かった、分かった。じゃあ今週の日曜日な」

「わーい！じゃあユナをぺろぺろしてくるね！」

と言うと咲也はユナの部屋へ駆け込んだ、待て、あいつなんて言った？ユナをぺろぺろ？

「ユナあああ！」

「キャアアア！」

遅かった、ユナの部屋から悲鳴が聞こえてくる。勢いよく戸を開ける、そこには咲也に襲われているユナの姿があった。

「やめんか」

コツンと咲也の頭を叩き、ユナから引き剥がす。見る、呆然としてるじゃないか、可哀想に。

「おお、神よ！貴方は私たちの恋路を邪魔しようと言っのですか・・・！」

べたな演技をしてみせる。

「邪魔する、それはもう再起不能なぐらいに」

「あ、そこまでしちゃう」

咲也は大人しくなり、俺の部屋でゲームをしだした。俺は放心状態のユナを起こす、ユナは泣き出し俺はそれを慰めた。

「よくも私のユナを泣かせたわね・・・」

部屋からユリツクの声がする。

「あら、妹が襲われてるのに助けに来ないようじゃあすぐに盗られるわよ？」

どうやら言い争ってるようだ。

「じゃあこれでどちらが宝を取れるか勝負よ！」

なんだ、ゲームで勝敗を決めようと言っのか？俺は泣き止んだユナを部屋に残し自分の部屋を覗いた。

「ちょ、輝也！これデータ消えてるんだけど！」

電源を点けると画面に表示されたのは0%0%0%の文字、本来そこは俺の努力により100%100%100%なのだ。

「ああ、そのゲームはデータ消えやすいんだよ、てかなんでそのゲームで勝負しようとする、格ゲーがあるじゃないか」

「そうだった！じゃあ格ゲーで勝負よ！ユリツク！」

咲也はそう言うのとパソコンの電源を点け、インストールされていた格ゲーをクリックし、始める。俺は放っておこうというわけでユナを連れどこかに出掛けることにした。

すっかり夏の暑さはなくなり、冷たい風が吹く季節になった。

「さみーな、服買っていてよかったな」

清香から貰った服は夏服ばかりだったので冬服を買っておいた、ここで役に立つとはな。

「あら、輝也ちゃんに・・・」

ちょうどそこに清香のお母さんと出逢う、手にはサツマイモの入った袋が。

「あ、おばちゃん。こいつはそのー居候というか・・・」

なんと説明すべきか、妖怪であることがバレれば厄介なことになりそうだ。

「へえ居候、ねえ」

とニヤニヤする、なんだ、別にそれ以上の関係では。

「ま、いいわ。今から神社で焼き芋するんだけど、どう？」

と言うので御言葉に甘え焼き芋を頂くことにした。

鶴野神社はすっかり秋模様になっており、清香のお婆ちゃんが落ち葉をかき集め火を着けていた。

「おお！輝也に——」

「あ、ユナ。つていいいます」

「なんじゃ！婿に入る身と言うのに女がいるのかえ！？」

「お母さん！まだ婿に入ると決まったわけじゃ！」

「ハハハ・・・」

暫くすると焼き芋のいい香りがしてきた、頃合いを見てお婆ちゃんは落ち葉の山から焼き芋を取り出すと新聞紙にくるみ、二人に渡した。

上手に皮を剥くと濃い黄色の中身が姿を見せ湯気が勢いよく立っている。アチアチと言いながら四人は焼き芋を食べる。

「そっじゃ、清香は元気だったかの？」

突然そんなことを聞き出すお婆ちゃん。

「へ？清香……」

なぜそんなことを突然……

「見知らぬ女と社に駆け込む姿を見りや分かるわい、高天原へ行ったのだろう？」

全てお見通しのようだ。

「ええ、元気にしてましたよ。それに助けてもらいました」

「それはよかった、ただ気になるのは――」

とお婆ちゃんは輝也をじっと見つめる。

「その暗い、混沌とした禍々しい気じゃ。じゃがその気は決して妖怪のものではない……それはなんじゃ？」

まさかマガツチのことを見抜くとは。

「それは……」

「いや、言わんでええ。その力をどう使うかはあんた次第、わしゃ口出しせんわ。さ、豊穰の神様に感謝せんとな」

と手を合わせる、俺も手を合わせるがユナだけはしなかった。そうして二人は神社を跡にした。

「フフ」

「何を笑っておる」

「いえ、妖怪を前にして戦わないお母さんが珍しくって」

「わしゃ無害な妖怪は退治せんでの、輝也の妖怪は無害にも無害。あまりにも無害じゃ」

「本当にそれだけですか？」

「や、喧しいわい！家に入るぞ！寒いわっ！」

「ただいまあー」

「おかえりー、飯」

家に帰ると迎えに来たのはユリックだ。勝敗はどうなったのだろうか。

「わーかった、飯な、飯」

「今日はカレーだって」

ユナは買い物袋を見せて言う、ユリックはわーいと喜び部屋へ戻る、どっちが姉だろうか。

「さ、作るか、ユナも手伝って」

「はい」

着々とカレー作りを進めていく二人、するとユナが

「ねえ輝也」

「なんだ」

「その・・・迷惑じゃないかな・・・？」

「なに言ってる、お前らがいて迷惑だと思ったことはねーよ」

するとユナの顔はパアと明るくなり、恥ずかしそうにまたカレーを作る作業へ戻った。

考えてみればユナは俺にとっての何なのだろうか、ただの居候。で済ますことが出来ない感じもする、だからと言って恋人？いやそこ

までは・・・だが守るべき人であることに変わりはないな。

そんなことを考えているうちにカレーは出来上がり、ユリックを呼ぶ。どたどたと階段を降りてくると椅子に座り、テーブルに並べられたカレーを食べ始めた。

カレーを食べる吸血鬼二人を見てふと思う、ユナはともかくユリックは血を吸っているのだろうか？深夜に出歩く姿も見ないしそれらしい雰囲気もない。そもそも血なら俺を吸えばよいのではないだろうか、うーむ、よく分からない、直接聞いてみるか。

「なあユリックは血は吸わないのか？」

するとユリックは含み笑いをして答えた。

「さあ、どうかしらね」

「なんなら俺の血を」

「あのね、あんたはマガツチの力を持つて、多少なら構わないけど貴方の血は毒に変わらないわよ」

「そうか、吸い続けたらどうなるんだ？」

「さあね、死ぬんじゃない？」

「そうか、なるほどな」

「でも・・・輝也の血は美味しかったよ・・・？」

ユナはそう言う、フォローのつもりなのだろうか？ いや別にフォローされるような状況では。

「何よ、人間のくせに」

ユリックは焼きもちを妬いたようだ。

「さて——ごちそうさま」

夕飯を済ませ、自室へ戻ると酷い荒れようだった、これがユリックと咲也の仕業なのは考えるまでもない。

ユリックを呼び出すとげんこつを一つ、そして部屋を片付けさせた。吸血鬼は人間よりも永く生きているのにどうも子どもっぽい。

「ほい、片付けたよ」

綺麗に片付けられた部屋、そしてユリックは立ち去る。しかしその手に持っているものはなんだ。

ユリックを引き戻し手に持っているものを引き剥がした、それは紛れもない俺のエロ本だった。

「何盗むつもりだったんだ！」

「これをカッラにしようと思ったんじゃない」

どこまでも惚ける奴である、しかし言い訳が下手なものには程がある。

「分かった分かった、戻れ」

そう言いユリックを部屋から追い出す、ふとネラプシを思い出した、元気にしているだろうか。少し咲也に聞いてみるか。

携帯電話を取りだし登録された咲也の番号へ発信する、数回のコールのあとに「もしもし」と咲也の声が聞こえた。

「ああ、咲也か。ネラプシは元気か？」

『まるで親ね。元気にしてるわよ、あの娘結構わがままだけど私の前じゃネコだからね』

ネコ？ 一体どういうことだろうか。

『昨日なんか大変よ、ずっとべったり引っ付いて、それから――』

それから数十分、ネラプシの話を聞かされた。適当なところで電話を切る。わあ、電話代が凄いことに。

しかしこの短い間に色々あった、死にかけたこともあった。だがこのマガツチの力で生き永らえたようだけど、もしかしたら既に死んでいるのでは？ と疑問に持った、だけどこの胸の鼓動は紛れもない生きている証である。

「この力をどう使うかは自分次第、か・・・」

『十四章 吸血鬼と安息』（後書き）

このままだと永遠に続きそうなので一旦区切る。誤字脱字があれば教えてください。

『十五章 吸血鬼と幽霊船』

ある日、咲也から一通のメールが着た。

『連休を利用して私の持つてる島に遊びに行かないか』

なんで俺の周りには金持ちしかないのか、まあ興味もあるので行くが。集合場所を見るとある港のようだ、船は誰持ちなのか。

そして例の港に辿り着いたわけだ、寂れた港で嫌な静けさが怖く感じる。ユナは海を眺めているが怖いのか余り近づこうとはしない。ユリックには留守番を頼んだ、あいつは出掛けるよりゲームだそうだ。

何もない港で暫く待っていると一隻の船がこちらに向かってきて港に停まった、結構デカイ客船である。船のデッキから誰かが手を振っている。

「おい！君が輝也君だね！？咲也が待ってますよ！」

「だそうだ、行くよ、ユナ」

カモメにつつかれているユナを引っ張り、船へ入る。中はとても綺麗で軽やかなジャズが流れている。

「やや、御待ちしておりました！ささ、御部屋はこちらです」

デッキにいた男が部屋まで案内する、ドアが沢山並ぶ廊下に出る、何だか遠くで人の声が聞こえる、俺たち以外にも誰かいるようだ。

「ここが御部屋になります。これが鍵で御座います」

男は鍵を渡すと礼をして立ち去った、早速ドアを開けてみればなかなか綺麗な部屋、気に入った。

早速咲也と合流しようと携帯電話を取り出した時だ。

ピリリ

着信音が鳴る、咲也からだ、手早く携帯電話を開きボタンをプッシュする。

「もしもし、咲也？今船だよ」

『はあ？まだ来てないでしょ？』

「ハハハ、何を言ってるんだよ、立派な客船じゃないか」

『客船・・・？ちよつと輝也！その船なんて名前！？』

「名前？ちよつと待って」

辺りを見渡す、大抵パンフレットが——あった。

「えーとね、《イワンワシリー号》？だつてさ」

英語だが何となくは読めた。

『イワンワシリー号？とにかくそれは私の船じゃないわね、早く降

りなさい!』

「むう、そうだな。そうするよ」

通話を終え、部屋から出ようとした、そこで一つのことにつっ掛かる。

あの男、デッキにいた男は何と言っていた? ああ、確か『咲也が待っている』と――

『イワンワシリ号、出航します』

無機質なアナウンスが流れる、マズイ! このままでは!

しかし遅かった、船はゆっくりと動き出し、港から離れていく。待てよ? 港の場所は間違っていないはずだ、なら何故咲也はこの船に気づかない?

「ユナ、厄介なことになった」

「なあに?」

ユナはベッドの上でうとうととしていた、いや確かに気持ち良さそうなベッドだが。

「乗る船を間違えた、それに俺たちを案内した男を覚えているか? あいつは嘘を言っていた、咲也はここにはいないそれに奴は咲也と俺の名前を知っている」

これはどういうことが、ただ分かることは奴は俺たちの敵。そして最も怖いのは――

ギリツと奥歯を軋らせる。ここは船、一つの牢獄である、恐らくここには敵しかいない。逃げ道もない。

「クソツ！やられた！」

ドンツとテーブルを叩く、窓を見れば辺りは霧に包まれどっちがどっちなのか分からない状況だった。

どうする？このまま部屋に籠るか？いや、マスターキーやらで開けられてはお仕舞いだ、だが外に出ればまさに四面楚歌、いつ殺されるか。それにこの船は何処へ向かっているのか、霧のせいで進んでいるのか分からない。

「くっ・・・咲也・・・」

携帯電話を開く、だが圏外になっていた。じっとしても仕方ない、部屋を出てみよう。

廊下に出ると人の騒ぎ声が聞こえる、部屋に鍵を掛けるとそちらへ向かった。

すると両開きのドアがあり、開けてみるとワツと一気に声が大きくなる、ホールのような、大勢の人たちが話し合っている。

「おや、輝也様、どうなさいましたか？」

デッキの男だ。

「この船はどこへ向かっているんですか？」

「この船は——へ向かっております」

周りの声がうるさくて聞き取れなかった、もう一度聞こうとしたが。

「あ、咲也様をお呼びいたしますね」

男はホールをあとにする、暫くして——

「あ、ここにいたんだ!」

そこには咲也がいた。これはどういうことか、咲也は確か、いや、これは偽者か?しかし瓜二つである。

「どうしたの?ボーってして」

「あ、いや、何でも」

おかしい、もしかすると電話の相手が偽者?いやそれだと電話をする意味がない。

「ねえ!デッキに行かない?いい景色だよ!」

バカな、窓の外は霧だったはず。俺は咲也に連れられデッキまで行く、するとどうだろうか、あの霧は嘘のように消えていた。

「これは……一体……」

啞然としていると。

「そうだ、ねえ。輝也のマガツチの力を見せてよ」

何を言っているのか。

「何言ってる、あれはユナを守るための――」

「ユナ・・・？」

確信した、こいつは偽者だ！俺は飛び退き、拳を構える。咲也は首を傾げている。

「なんだお前は！誰なんだ！」

するとニヤリと咲也は口元を歪める、そして体がぐにゃぐにゃとスライムのように動き――

「バレてしまいましたか、これは私の情報不足、不覚です」

あの男だった、こいつはなんだ、妖怪か？

「何が目的だ！なんなんだお前は！」

「まあ慌てないで下さい、私は《ポー》、貴方が持つ神の力を奪いに来ました」

「誰がそんなこと！」

「では力ずくで行きますか！」

ダッ！とポーは駆け寄る、だがその早さは常人。スッと避ける。

「貴方の力が見たい、存分に使ってくださいよ！」

腕が機械になり、殴りかかる。

しかし見え見えの攻撃、避けると拳はデッキにぶつかり、激しい衝撃とクレーターを作り上げる。

「ふむ、シエリダンの真似でもダメですか、なら——」

背中に黒い、鳥の羽根が生える。そのまま空を舞い、手の平に光の玉を出す、まさか——

「これはある少年が持つ神の力——灼熱地獄の始まりです！」

その玉を輝也目掛けて飛ばす、だが玉は何かに打ち消される。

「何事です！？」

何かが飛んできた方向を見る、だがそこには太陽が照っているだけだった。

ドツドツ！

次にまた何かが飛んできた、それはポーの羽根を撃ち抜き、ポーを地面へ落とした。

「何が！クソッ！」

「輝也！」

デッキにユナが来る、しかし太陽があるせいでそれ以上は進めないようだ。

「おや、彼女がユナですか。ならば」

手の平に光の玉を作り出し、それをユナに向ける。

「——やめろ！」

反射的に黒い影が現れ、それは棘となり、ポーを貫く。死んだようにぐったりとしていたが

「これが、マガツチの力……！素晴らしい！」

ニヤリと笑い輝也を見る。

「実にいい力です！是非コピーしたいところでしたが——」

ゴフツと血を吐く、もう時間はないようだ。

「残念です、当たりどころが悪かった見たいですね……ですが！見ていて下さいましたか！？」

空に叫ぶ、誰か見ているのか？

『ああ、見ていた。お前は十分働いた』

どこから声がする、しかしデッキに輝也とポーとユナしかいない。

「有り難き御言葉！」

『ああ、分かった。お前は休め』

ヒュツと何かが落ちてきた。

ドオン！

それはポーの真上から降り、ポーを貫いた。

巨大な棒、いや槍だ。

「マガツチの力を持つ者よ——」

その槍のてっぺんに男が一人、立っていた。

「何故お前は神の力を持ち、妖怪を守る？」

「何を・・・言つて・・・」

「神と妖怪は相容れぬ、どうしてもな」

「何を言つて・・・というか仲間をなんで殺した！」

「仲間？知らぬ、ただ勝手に着いてきた愚者よ」

「テメエ！あんなに慕つてたじゃねえか！」

「だからどうした。という話だ」

輝也が男に向かおうとしたときだ、何か黒い影が動いたかと思えばユナが男に殴りかかっていた。男は平然と拳を受け止めた。

「小娘が・・・調子に乗るな」

そのままデッキへと叩きつける、男は槍を抜くとユナへ向けた。

「貴様の墓標はここだ、永遠の命をここで終えろ」

しかし黒い影が男の腕を掴む、男は黒い影を見ると諦めたのか槍を消し、何処かへ立ち去ろうとする。

「まあいい、またいずれ会おう」

「おい、お前はなんて名だ？」

「・・・俺か？《ポリドリ》だ。ではまたいつか」

スツと霧のように消える、船はゴゴゴと音を立てると方向を変え始めた。

「輝也、大丈夫？」

「大丈夫、それよりユナ！何であんな危ないことを」

「うう・・・ごめんなさい。でも私も何かしなくちゃいけないと思
つて」

「・・・そうか、ありがとな。部屋に戻ろっか」

部屋に帰ると急激な眠気に襲われた、抵抗出来ず眠ってしまう。

——也！——也！——輝也！

ハッと名前を呼ぶ声で目が覚める、そこには咲也がいた。

「よかったー、生きてた」

「ここは・・・港・・・？」

「何があつたの！？」

「い、いや。確か」

あの船であつたことを伝えた、すると咲也は顎に手を添え考え始めた。

「ポーにポリドリ・・・今度はユナじゃなく貴方を狙う奴が出てきたのね」

「ああ、そうみたいだ」

「なんで嬉しそうなのよ」

「いや、俺が狙われるならユナの危険が減るなって」

「・・・呆れた、ユナの為なら死んでも構わないってことね、バカじゃないの？いやバカね」

「ああ、バカさ」

「はあ、まあいいわ。なるようになれば。ネラプシ、こいつらを船に連れてって」

「はい」

とネラプシはユナを担ぐと港に停まっている小さな船へ運ぶ、輝也はそのあとに着いていく。

「・・・何故助けたの？貴方」

太陽が照る空に言う、日傘が邪魔だが。

「なんて言っても答えないか、何が企みか知らないけど、いいの？貴方は人から確実に離れている」

『ああ、構わないさ。今更何を失うか』

何処から声がする、何故出てこないかは言わないが。

「そう、でもね。神に近づいても神に成ることは出来ないわよ」

『いや、俺は現人神と成る』

「ふうん、ま、止めはしないけど」

そう言つと咲也は船へ向かった。カモメの代わりに鳥がギヤアギヤアと空を飛んでいた。

『十五章 吸血鬼と幽霊船』（後書き）

誤字脱字等の御報告や感想お待ちしております。そのうちキャラの元ネタ解説とか—— いないか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1879v/>

俺と吸血鬼の非日常

2011年10月12日01時53分発行